

法政大学 国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.22 Jul.2015



C O N T E N T S

シンポジウム報告	2
研究会報告	6
東アジア文化研究会報告	11
勉強会報告	21
催事一覧	24

2014年10月30日(木)～11月1日(土)

2014年アルザスシンポジウム

国際日本学シンポジウム

「<日本意識>の未来——グローバル化と<日本意識>」
(アルザス欧州日本学研究所(CEEJA))

2014.11～2015.3活動報告

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
 国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来
 研究アプローチ④「日本意識」の三角測量—未来へ」

2014 年アルザスシンポジウム

国際日本学シンポジウム

「日本意識」の未来——グローバル化と「日本意識」

- 日 時：2014 年 10 月 30 日（木）～11 月 1 日（土）
- 共 催：法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学研究センター東アジア文明研究所、ストラスブール大学人文科学部日本学科、アルザス欧州日本学研究所
- 会 場：アルザス欧州日本学研究所

1. シンポジウム全体の概要

法政大学国際日本学研究所（HIJAS）は、2005 年以来、フランスの日本学研究所と共同で、毎年国際日本学シンポジウムを開催してきた。2014 年にも、10 月 30 日から 11 月 1 日まで、「日本意識」の未来——グローバル化と「日本意識」と題するシンポジウムをフランス国立科学研究センター東アジア文明研究所（CRCAO）、ストラスブール大学日本学科、およびアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）との共催で、2007 年以後の会場である CEEJA で実施した。

今回の主題である「日本意識」の未来——グローバル化と「日本意識」は、HIJAS の 2010 年度からの研究課題「国際日本学の方法に基づく「日

本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来」（文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択）によっている。本研究課題が 2014 年度で終了するため、今回のシンポジウムは 5 年に亘って行われてきた「日本意識」の再検討」研究を総括し、「日本意識」の未来を展望するためのものと位置づけられた。グローバル化という時代の潮流の中で「日本意識」は今後どこに、どのように位置づけるべきであるのか、さらには「日本意識」にそもそも未来はあるのか、といった問題について、思想、歴史、文化、政治、建築、工学、環境といった諸側面から、日本側 9 名、欧州側 7 名が報告を行い、さらにその報告について総括の討議を行った。

Table 1 Detail of the Symposium

Date	Name	Affiliations and Country	Theme	Language
30th October 2014	Johannes Wilhelm	University of Vienna [Austria]	We just want to be staying here... Social vulnerability and resilience in rural villages of Eastern Japan	English
	Josef Kreiner	Hosei University [Japan]	Interdisciplinary and international approaches to the study of Japanese culture and society - the case of the Aso-Project of Vienna	English
	Min Wang	Hosei University [Japan]	The common dream of Japan and China in East Asia: On sericulture and the filature of Tomioka (World Heritage Site)	Japanese
	Tsutomu Hoshino	Hosei University [Japan]	Globalisation and fudo ('Climate')	Japanese
	Shin Abiko	Hosei University [Japan]	Le dépassement de la modernité repensé	Japanese
	Akinobu Kuroda	University of Strasbourg [France]	La logique de l'espèce en tant que théorie de base pour la construction d'une nouvelle communauté plastique	Japanese
31st October 2014	Sergei Chugrov	Moscow State University of International Relations [Russia]	Japan in search of its new identity in the globalisation era (An essay in sociological analysis)	English
	Paul Jobin	Paris Diderot University - Paris 7 / School for Advanced Studies in the Social Sciences [France]	Taiwan and Okinawa: Postcolonial variations	Japanese
	Dmitry Streltsov	Moscow State University of International Relations [Russia]	The complex of victimization as a part of the Japanese postwar national identity	English
	Masaharu Hishida	Hosei University [Japan]	Ambivalence in historical memory - The image of Japan in contemporary China	Japanese
	Masashi Oguchi	Hosei University [Japan]	La 'mondialisation' du Japon à l'époque ancienne - L'État des codes, les missions officielles et la culture japonaise	Japanese
	Yusuke Suzumura	Hosei University [Japan]	The resolution of conflicting ideologies with an outlook for the future: Ishibashi Tanzan's arguments about ideology as a divisive	English
1st November 2014	Junzo Kawada	Hosei University / Kanagawa University [Japan]	L'usage polyvalent des ressources végétales et l'es-thétique de mitate: ce que le Japon peut contribuer à l'avenir de l'humanité	Japanese
	Benoît Jacquet	French School of the Far East, Kyoto Branch [France]	On things to come: What contemporary Japanese architecture should be like	English
	Paul Dumouchel	Ritsumeikan University [Japan]	The robot as an individual	English
	Josef Kyburz	East Asian Civilisations Research Center [France]	Does Japan have a future?	English

2. 各発表の概要

今回の報告者 16 名による発表の概要は以下の通りである。

第 1 日目

(1) ヨハネス・ヴィルヘルム（ウィーン大学 [オーストリア]）／ただ、ここに、住み続けたい—東北の集落にみられる脆弱性と強靭さ

古来、東北地方が「中央に対する辺境」、あるいは「内なる植民地」と捉えられてきた現実を背景に、宮城県石巻市寄磯浜と秋田県上小阿仁村八木沢という沿岸部と山間部の過疎集落の住民を事例として、「持続性」の観点から、高度成長期以降の住民と自然との関わりを検討し、東北地方の伝統的な社会性に潜む強靭さを指摘した。

(2) ヨーゼフ・クライナー（法政大学 [日本]）／学

際共同調査研究による日本社会・文化の相互理解 (代読：ヨハネス・ヴィルヘルム)

澁澤敬三の主導により戦後、人文・社会諸科学による学際的共同研究が実現し、最盛期には九学会連合という形で各種の調査が行われた例を挙げて、今後の日本研究が進むべき道として、個々の科学が独自に研究を進めるといふよりむしろ、学際的アプローチを用いて統一テーマについて諸科学が共同研究を行っていく方向を模索すべきだと主張した。

(3) 星野勉 (法政大学 [日本]) / グローバリゼーションと「風土」

和辻哲郎の『風土』が説く「風土」概念の持つ積極的な意義を検討し、風土が自然と文化、空間性と時間性とを交差させるだけでなく、さらにはそこに身体性をも組み入れるものであり、結果として、風土論は身体論という側面を有し、人間の主体性の回復と空間の主体性の回復との繋がりを説くものになっていると主張した。

(4) 王敏 (法政大学 [日本]) / 近代化の宿題——富岡製糸場から蚕文化へ、シルクロードへ、ユーラシアへ

養蚕は日中韓3国に共通する伝統文化であり、富岡製糸場が象徴する製糸業が日本の近代化に貢献したとすれば、他のアジア諸国もそれを手本に近代化を手がけたのである。そして現在、日中韓3国はいずれも蚕文化の復元に取り組んでいる。このような具体例に触れつつ、東アジアにおける共通文化の重さと、それが未来に果たすべき役割とを指摘した。

(5) 安孫子信 (法政大学 [日本]) / <近代の超克> 再考

1942年に行われた「悪名高い」座談会「近代の超克」を対象にして、超克されるべきとされた「近代」に対するそこの論者たちの見解(アジア無視の<世界性>や実感信仰に基づく<美学>)と、今日の日本研究が身を置く場とを比較、検討し、過去と一線を画す新しい「日本意識」を確立することが、なお依然として難事となっていることを考察した。

(6) 黒田昭信 (ストラスブール大学 [フランス]) / 新しい可塑的共同体構築の基礎理論としての種の論理

田辺元の『種の論理』で「種の論理」の3要素「類・種・個」の内の種が国家に定位され優位化されているのは、田辺自身の「絶対媒介の弁証法」の不徹底からのものであり、それを徹底させる時、種の間接性、媒介性、可塑性が明らかとなり、種はむしろ非同心円的で多元的な社会の可能性につながるものになると主張した。

第2日目

(7) セルゲイ・チュグロフ (モスクワ国際関係大学 [ロシア]) / グローバル化時代の新たなアイデンティティを模索する日本 (社会学的試論)

社会調査の結果に依拠しつつ、ロシア人のアイデンティティに対する自己認識と比較することで、日本人による「日本人のアイデンティティ」の自己認識の特徴を検討するとともに、1990年代以降、ロシアに日本文化が流入したことで、現在では日本文化はロシア人にとって決してエキゾチックなものではないことを指摘した。

(8) ポール・ジョバン (パリ第7ドゥニ・ディドロ大学、社会科学高等研究院 [フランス]) / 台湾と沖縄：異なるポストコロナリアル状況

外国の支配ばかりでなく、自国中央政府による支配も受けたという共通の歴史を有する沖縄と台湾を対象に、現地世論調査の結果から、「独立志向の強い台湾」、「独立志向の強くない沖縄」という指摘を行った。加えて、日米や日中といった国際関係からではなく、沖縄から、日本を考えることこそが日本の未来にとって重要であることを主張した。

(9) ドミトリー・ストレリツォフ (モスクワ国際関係大学 [ロシア]) / 日本の戦後アイデンティティの一環としての被害者意識

1945年の敗戦以来、現在に至るまで続く日本の戦争責任問題について、米韓ソの側からの見方と日本における意識のあり方との比較検討を行った。その結果、日本にはむしろ戦争被害者の意識が残るということで、関係国には「日本は歴史の修正を行おうとしている」との疑念が生じることになっていることを指摘した。

(10) 菱田雅晴 (法政大学 [日本]) / 歴史記憶の中のアンビヴァレンス：現代中国における日本像

世論調査の結果を基に、日常生活では周囲を「日本」に囲まれ、「日本」を消費する人たちが「反日デモ」に参加するのは、日本の行動の反映であり、「反日」が人々にとって一種の記号となっていることを示すとともに、日中両国民の相手国判断が、もっぱら報道に基づくものであるということから、改めて接触理論の重要性を主張した。

(11) 小口雅史 (法政大学 [日本]) / 日本古代の「グローバル化」の真相——律令国家・遣唐使と国風文化——

近代以前の東アジアでの日本の位置づけを確認するとともに、白村江の戦いでの敗戦が結果的に日本に独自の律令制度を促したことを指摘した。さらに遣唐使が持つ意味を検討することで、東アジア世界におけるグローバル化が進展した時代であった7世紀から8世紀に遣唐使が果たした歴史的な役割と意義を考察した。

(12) 鈴木裕輔 (法政大学 [日本]) / イデオロギーの対立の克服と未来への展望——石橋湛山による断片的な力としてのイデオロギーへの批判

石橋湛山が雑誌『東洋経済新報』に執筆した論評からイデオロギーをめぐる主張を抽出検討し、石橋がイデオロギーに基づく行動を、対立する相手を征服するか減ぼすまで収束しないという断片的・排他的特徴を持つもの、と強く批判していたことを示した。そして、現在の日本に鑑みて、石橋のこのイデオロギー批判が持つ実践的意味の示唆を行った。

第3日目

(13) 川田順造 (法政大学/神奈川大学 [日本]) / 植物資源の多面的利用と「見立て」の哲学：未来の世界への日本文化の貢献の可能性を探る

「家畜文化複合」が限定され、むしろこまやかな植物資源の活用に向かった日本文化は、対象をなぞらえる「見立て」の思想を発達させていったことを示し、人口爆発や種の絶滅など、今日の文明の危機的状況に照らして、「分けてわかる」科学的方法を、「なぞらえ

て分かる」この「見立て」の文化で補完していく必要性を主張した。

(14) ブノワ・ジャケ（フランス国立極東学院〔フランス〕）／この後にくるもの：これからの建築の日本的性質

「現在の日本には日本建築はあるのか」という問いから出発し、丹下健三、篠原一男、白井晟一、妹島和世と西沢立衛、みかんぐみといった建築家の具体的な仕事の検討を行い、それを通して、現代の日本の建築が、西洋的要素と日本的要素との融合や、とくに抽象的な構造への日本的要素の取り入れに見事に成功していることを示した。

(15) ポール・デュムシェル（立命館大学〔日本〕）／ロボット、技術的個人とシステム

「すべての自律的な機械はロボットか」という問いを、技術的な側面と社会的機能の側面から検討し、25万台ものロボットが使用されている現在の日本において、ロボットが、その語源的意味である人間にとっての危険な競合者ではなくて、むしろ「よりよい人間を作るための手段」として理解されていることを示した。

(16) ジョセフ・キブルツ（フランス国立科学研究学院東アジア文明研究センター〔フランス〕）／日本に「未来」はあるのか？

印欧語族と東アジアの諸言語の文法を対比する際に時制が大きな違いとして浮かび上がることを手ごかりに、西洋と東洋の世界観の違いを時間的想像力と空間的知覚の両面から確認しつつ、日本の文化の持つ循環的な時間感覚と二次元的な空間理解が、ロボット技術を発達させるためにきわめて有益なものとなっていることを指摘した。

シンポジウム最終日の11月2日に行われた総合討議では、3日間にわたって行われた16件の発表を巡って、改めて参加者が活発な意見の交換を行った。その総合討議での話し合いの内容も踏まえて、「＜日本意識＞の未来」をめぐる今回のシンポジウムの成果を挙げれば、それは次のようなことになるであろう。

まず、これからの＜日本意識＞が参照し、依拠しうる具体的な対象物として建築とロボットが示された。日本の建築そして日本のロボットが、ある意味において他に抜きん出た特徴と特質を持っていることが、詳細に示された。その際に、日本の建築やロボットの特徴や特質を生み、支えているものとして、並行的に示されたのは、日本人の空間観（「二次元的」）であり時間観（「循環的」）、また生命観（「仲間」）であった。それは方法の言葉として言えば、「分けてわかる」と

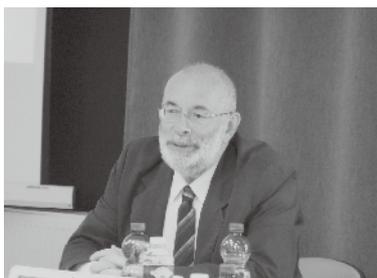
いうのではなく「なぞらえてわかる」という「見立て」の立場ということになるであろう。またこのような世界観と方法論をさらに全体として統べる言葉を探せば、「風土」となるのかもしれない。こうして、美的直観（「実感信仰」）としてある、未来にも及ぶ＜日本意識＞の核のようなものは、シンポジウムでは十分に示されたと思う。

ただ、同時にシンポジウムが問うたのは、＜日本意識＞のその特質に、本当の開きを担保する位置づけの問題であった（「世界性」の問題）。＜日本意識＞が閉じてただの自賛に帰着することをどう避けるか。この開きに保証を与えるべき参照枠としてシンポジウムが提示したのは、「東北地方」であり「沖縄」であり「東アジア」であった。またそのような開きに導く方法論としてシンポジウムが掲げたのは、「種の論理」であり「接触理論」であり、また「実利（反イデオロギー）」であった。こうして、現在求められるべき＜日本意識＞に関して、その核だけではなく展開の枠や方法論をももたらすということで、今回のシンポジウムは確かな成果を挙げたのである。

以上のシンポジウムの成果の取りあえずのまとめに加えて、最後に、シンポジウムの別様の成果にも一言触れておきたい。それは2011年から始まったストラスブール大学日本学専攻の大学院修士課程の学生による聴講が、今回も行われたことである。この学生参加は、2011年度から、法政大学文学部哲学科とストラスブール大学日本学科との間で、正規の合同授業が成立していることに依っている。すなわち、法政大学側では「国際哲学特講」と名付けるこの授業の両大学の受講者は、9月からの学期中に、翌2月に約1週間まさにCEEJA（とストラスブール大学）で行う合同ゼミに備えた学習を、それぞれの大学で行うことになっているが、ストラスブール大学の学生にとっては、このシンポジウムへの聴講参加はその事前学習の一部となっているのである。日本語で行われる合同ゼミのために日本語に慣れておくということを超えて、合同ゼミの今年度のテーマは「靖国問題」であり、＜日本意識＞をめぐる今回のシンポジウムがそのためにきわめて有益なものであったであろうことは想像に難くない。CEEJAでの研究プロジェクトがこうして教育にも確かな貢献をしていることは、大変喜ばしいことである。

【記事執筆：

安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）、
鈴村 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）



ポール・デュムシェル氏
（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）



ブノワ・ジャケ氏
（フランス国立極東学院京都支部長）



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

2014 Alsace Symposium

International Japanese Studies Symposium “The Future of ‘Japan-consciousness’: Globalisation and ‘Japan-consciousness’ ”

Date: Thursday, 30 October – Saturday, 1 November 2014

Sponsors: Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS, L'UMR 8155 Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale: CRCAO, Le Département d'études japonaises de l'Université de Strasbourg, Le Centre européen d'études japonaises d'Alsace: CEEJA

Venue: Le Centre européen d'études japonaises d'Alsace: CEEJA

The theme on this occasion, “The Future of ‘Japan-consciousness’: Globalisation and ‘Japan-consciousness’”, was based on the research topic, “Re-examining ‘Japan-

consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future” (selected as MEXT Strategic Research Base Development [Grant-aided] Project for Private Universities), in which HIJAS has been involved since 2010. As the research topic reaches its end in 2014, this symposium summarised the research in “Re-examining ‘Japan-consciousness’” conducted over the five years, and created a standpoint for viewing future “Japan-consciousness”. The issue of where and how “Japan-consciousness” will find its place within the onslaught of the globalisation era - whether “Japan-consciousness” even has a future - were reported on, and debated in general, from the various perspectives of thought, history, culture, politics, architecture, engineering and the environment. Participants numbered nine from Japan and seven from Europe, signifying that this present search for “Japan-consciousness” was not limited to a theoretical framework, but was being put into practice. The symposium was also attended by Master's students in Japanese Studies at Strasbourg University. It thus achieved educational goals as well as those of research.

Report by: Shin Abiko (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters); Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成26年-26年)

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来
研究方法④“‘对日认识’的三角测量——面向未来”

2014年阿尔萨斯研讨会

国际日本学研讨会

“对日认识”的未来—全球化与“对日认识”

日期: 2014年10月30日(星期四)~11月1日(星期六)
共同举办: 法政大学国际日本学研究所、法国国立科学中心东亚文明研究所、斯特拉斯堡大学人文科学部日本学科、阿尔萨斯欧洲日本学研究所

会场: 阿尔萨斯欧洲日本学研究所

此次研讨会题为“‘对日认识’的未来—全球化与‘对日认识’”。主要围绕法政大学国际日本学研究所从2010年

开始展开的研究课题“基于国际日本学研究方法的‘对日认识’再讨论—‘对日认识’的过去·现在·未来”(文部科学省私立大学战略研究基础形成事业采纳)来进行。由于本研究课题在2014年即将结束,所以本次研讨会对5年以来所开展的关于“‘对日认识’再讨论”研究进行了总结,并提出了对未来的展望。研讨会围绕在今后的全球化时代浪潮中将“对日认识”定位在哪里、如何定位,以及“对日认识”是否有研究前景等问题,从思想、历史、文化、政治、建筑、工学、环境等各方面出发作了报告并进行了综合性讨论。参会人员日本方面有9名,欧洲方面有7名。针对现在所被需求的“对日认识”,会议不仅提出了理论性的框架,更揭示了实践性的应有姿态。此外,斯特拉斯堡大学研究生院日本专业的研究生也旁听了此次研讨会。通过这样的方式,研讨会不仅在研究层面,在教育层面也取得了一定的成果。

【执笔者:安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授),铃村 裕辅(法政大学国际日本学研究所客座学术研究员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

2014년 알자스 심포지엄

국제일본학심포지엄

<일본의식>의 미래-글로벌리제이션과 <일본의식>

일시: 2014년 10월 30일(목)~11월 1일(토)
공동개최: 호세이(法政)대학교 국제일본학연구소, 프랑스 국립과학센터 동아시아문명연구소, 스트라스브르 마르크 브로크 대학 인문과학부 일본학과, 알자스 유럽 일본학연구소

장소: 알자스 유럽 일본학연구소

이번 테마인 “<일본의식>의 미래-글로벌리제이션과 <일본의식>”은 HIJAS가 2010년도부터 진행하고 있는 연구과제인 ‘국제일본학 방법에 근거한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래’(문부과학성 사립대

학 전략적 연구기반 형성지원 사업 채택)를 토대로 한 것이다. 본 연구과제가 2014년도에 종료함에 따라 이번 심포지엄은 5년에 걸쳐 연구되어 온 <일본의식>의 재검토에 대한 연구를 총괄하고 <일본의식>의 미래를 전망하기 위한 것으로 설정되었다. 앞으로 글로벌화라는 시대적인 조류 속에 일본의식이 어디에 어떻게 자리매김해야 하는지, 더 나아가 일본의식에 미래가 있는지 등의 문제에 대해 사상, 역사, 문화, 정치, 건축, 공학, 환경이라는 여러 측면에서 보고와 토론이 이루어졌다. 참가자는 일본 측에서 9명, 유럽에서 7명이 참가했다.

그 결과 현재 필요한 <일본의식>에 관해서는 이론적인 틀뿐만이 아닌 실천적인 부분에 관한 방식이 제시되었다. 또 심포지엄에는 이번에도 스트라스브루 대학 대학원의 일본학 전공 석사 과정 학생들이 청강했다. 이러한 점에서도 이번 심포지엄은 연구적인 측면뿐만이 아니라 교육적인 측면에서도 성과를 거두었다고 할 수 있다.

【기사집필: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수), 스즈무라 유스케(鈴村 裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来
研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

第 4 回研究会

江戸時代の女性の稽古事

- 報告者：谷村 玲子（国際基督教大学アジア文化研究所研究員）
- 日 時：2014 年 12 月 12 日（金）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：横山 泰子（法政大学国際日本学研究所所員、理工学部教授）

明治以降の女性の諸芸・稽古事に関する研究において、既にいくつもの成果が上がっている。ところが江戸時代の女性の芸能に関しては、身分によって文化が違うこと、そして女性の実際の活動についての史資料が非常に少ないことから、総括的な論議は難しいと言わざるをえない。

一七世紀半ばから幕末に至るまで、女訓物や往来物といった様々な女性用刊行本が出版された。同じ本でも豪華装丁本と廉価本が出版されることもあり、また本文の中でも「りやくぎにては」（『女諸礼集』）、「中人より以下は」（『女用智恵鑑』）、「それぞれのほどにまかせて」（『女重宝記』）と、読者層に幅をもたせる例がいくつもある。刊行本の多くが、町人、豊かな農民、武士と、身分を超えた広い読者を想定し、著者の「こういう女性であれかし」を述べたものだったと言える。発表では女性用刊行本の諸芸に注目し、手習、琴（琵琶）、詠歌、たち・ぬい・つむぐ・うむ、学文、香、貝合（貝覆）に関する記述を時代別に紹介し、その上で茶の湯と三味線稽古に言及した。

女子の手習い—読み書き—の奨励は、早くも寛永一四年（一六三七）頃に刊行された『女式目』に見られ、その後も「読み書きできなければ“盲”のごとし」という表現は幕末まで続く。少なくとも平仮名に限れば、江戸時代にはかなりの数の女性が読み書きできたと考えられる。諸芸の中でも琴は、江戸時代を通して女性にふさわしい芸能であり続けたが、幕末近くには「糸竹の道」（音楽）の挿絵に、琴ではなく三味線を載せる本もあった（『新增女諸礼綾錦』）。時代が下ると国学の影響も様々な箇所で見られ、例えば歌学に関しては、天保三年（一八三二）序の『女式目鑑草』では、「真淵のうひまなび（注「宇比麻奈備」）などをよく心得さすべし」とある。時代の変化は、たち・ぬい（裁縫）・つむぐ・うむ（紡績）の記述にも見られる。裁縫・紡績は奨励され続けたが、しかし『女重宝記』の元禄版（一六九二）と弘化版（一八四七）を比べれば、うみ・つむぐ（紡績）が、一般的な女性の技能でなくなっていたことは明らかである。刊行本からは、時代によって女性の諸芸が変化していることがわかる。

刊行本の記述と現実に大きな隔たりがある芸能は、三味線（音曲）である。三味線については、すでに寛文元年（一六六一）刊行の『比売鑑』に「辻・盲目・遊女・乞巧の手慰」と差別的な表現が見られ、一方ですでに万治三年（一六六〇）の『女用訓蒙図彙』には、女性の身の回り品として三味線の図がある。その後も多くの刊行本は三味線を「淫乱」「淫声」と嫌ったが、特に町人・富裕な農民の娘達は三味線音曲の稽古に精を出した。天和元年（一六八一）の『都風俗鑑』から

幕末の『守貞謾稿』に至る様々な書が述べるように、武家の間では三味線を「淫声」と蔑みつつ、高位の武家達は奥女中志望の娘達に対し、三味線音曲の技能を望んだからである。

刊行本で茶の湯への言及の最も早い例は、元禄版『女重宝記』である。しかし飲み方を簡単に記述するだけである。ところが宝暦三年（一七五三）の『女郎詠教訓歌』では、「立ち居ふるまいもしとやかに見える」、「薄茶点前をたしなみ習え」と茶の湯稽古を勧め、さらに「宮仕えの身はまなびおくべし」とある。幕末に至るまで、刊行本の茶の湯の項目には「しとやかさ」の強調と共に、「宮仕え」への言及が見られる。武家の教養である茶の湯は、点前のみならず娘達が稽古を通して得る何気ない動作・所作を含め、「宮仕え」（武家屋敷奥女中奉公）の際に有利な芸能であった。

武家奥女中奉公の実態は、時代によって若干の変化はあるものの、娘の勤めは給金を目的としたものではなかった。森鷗外は『渋江抽斎』の中で、「女学校へ行くようなもの」と表現した。親は奉公によって娘が武家文化に身近に接し、世間的には箔が付き、奉公後の良縁に繋がることを願った。

奥女中奉公には、武士・町人・近郊富裕農民の身分の異なる娘達が集まった。『浮世風呂』には、何年かの奉公の間に、町人の娘のしぐさや話し方がすっかり武家風が変わってしまった話がある。江戸時代の女性の文化は身分によって異なるものの、武家奥女中奉公は本来の身分を超えた、理想的な女性の話し方・教養・文化を身につける場所であった。

女性用刊行本は身分を超えた読者に理想の女性を語り、理想的な女性に近づく具体的な諸芸と技能の情報を提供した。そして現実の社会でその読者と考える得る女性の多くは、武家奥女中奉公を目指して諸芸の稽古



右より：谷村 玲子氏（報告者）、横山 泰子氏（司会者）

に励んだ。武家奥女中奉公という場合は、身分差を超えて、広く好ましい「日本」女性形成の場として機能していたと言える。

【記事執筆：谷村 玲子

(国際基督教大学アジア文化研究所研究員)】

新刊案内1

国際日本学叢書 22

『受容と抵抗—西洋科学の生命観と日本—』(国際シンポジウム報告書)

Préface	Shin ABIKO
序	安孫子 信
Les deux sources du vitalisme dans la pensée de la période d'Edo	Alain ROCHER
江戸時代における生命論の二源泉	アラン・ロシェ (翻訳：石渡 崇文)
Robot Vie	Paul DUMOUCHEL
ロボ・ヴィー [Robot Vie]	ポール・デュムシエル (翻訳：小野 浩太郎)
Mon ami le robot	Dominique LESTEL
私の友達 ロボット	ドミニック・レステル (翻訳：松本 力)
Japanese translations of <i>natural selection</i> and the remnants of social Darwinism	Taizo KIJIMA
natural selection の日本語訳と社会ダーウィニズムの残留	木島 泰三 (翻訳：木島 泰三)
The biopolitics of contemporary Japanese society	Osamu KANAMORI
現代日本社会の生政治学	金森 修 (翻訳：鈴木 裕輔)
La spatialisation de la vie et les soins infirmiers dans un hôpital psychiatrique au Japon	Yasuhiko MURAKAMI
日本の精神病院における生活の空間化と看護	村上 靖彦 (翻訳：石渡 崇文)
«Science et technologie» autour de la gouvernance de la vie — réflexion à partir de la base historique de Nishida —	Masaru YONEYAMA
生命支配をめぐる<科学と技術>—西田における歴史的地盤から考える	米山 優 (翻訳：米山 優)
Théorie de la technologie chez Kiyoshi MIKI	Tatsuya HIGAKI
三木清の技術論—形をなすものとしての構想力—	榎垣 立哉 (翻訳：榎垣 立哉)
Le dualisme dans la philosophie de la symbiose de KUROKAWA Kisho	Thierry HOQUET
黒川紀章の共生の哲学における二元論	チエリー・オケ (翻訳：松井 久)



国際日本学叢書 23

『百年後の検証・中国人の日本留学およびその日本観 法政大学清国留学生法政速成科などの事例を中心に』

序論

百年後の検証・中国人の日本留学と日本観

—法政大学清国留学生法政速成科などの事例を中心に—

王 敏

第一部 法政大学清国留学生法政速成科の事例を中心に

辛亥革命と中国の日本留学—法政大学清国留学生法政速成科に関する一考察—

王 敏

梅謙次郎と法政大学速成科の創設

陳 健 (翻訳：相澤 瑠璃子)

范源廉と「清国留学生法政速成科」

臧 佩紅

日本滞在時期における章士釗—その活動を中心に—

周 曙光

周恩来と法政大学

王 敏

『速成科講義録』から鐔州約法への影響

馮 天瑜

法政大学(日本)蔵『速成科講義録』の学術的価値について

陳 健 (翻訳：相澤 瑠璃子)

漢文月刊雑誌『東洋』に関する一考察

蘭 一博

第二部 日本研究の現状と変容

昭和維新運動とアジア主義

筒井 清忠

韓国における日本観の変容

徐 賢燮

台湾における日本研究の現状と展望—政治大学を中心に—

于 乃明

中国人の「外国認識」の現状図—八か国イメージ比較を通じて日本の位置づけに焦点を当てて—

江 暉

中国でなぜ、漱石が読まれるのか—「同時代」思考及びその産出を課題に—

王 敏

日本における禹王信仰の覚書

王 敏

終論

日中異文化理解のために—儒教思想からのアプローチ—

王 敏



MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

4th Research Meeting

Accomplishments of Women in the Edo Era

Speaker: Reiko Tanimura (Researcher, The Institute of Asian Cultural Studies, International Christian University)

Date: Friday, 12 December 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Yasuko Yokoyama (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Science and Engineering)

Since Edo-period women's culture differs according to rank, it is difficult to capture the image of women in general of this era. A consideration of both jokun mono (guides for women) and orai mono (textbooks), however,

suggests that the number of books for women published during the Edo period, counted by year of publication, surpasses three thousand. Among them are items aimed at samurai, townspeople, wealthy peasants, and readers who without distinction of rank. This presentation highlighted statements regarding women's arts and accomplishments made in publications for women, and considered generational changes in the arts, and the goals of practice and study.

While samurai households despised the “lewd screaming” sound of the shamisen, town girls in service to samurai sought the skills of shamisen playing. Signs of such conflict can be seen in statements about the shamisen in some publications. However, the tea ceremony, a product of samurai culture, was an accomplishment encouraged among girls in service to samurai families. Girls wishing to go into service were also the readers of the publications, so that the publications surely tell us about the arts close to the heart of the rank-transcending, ideal woman of the Edo period. Samurai service, then, created the opportunity to fashion the ideal woman.

Report by: Reiko Tanimura (Researcher, The Institute of Asian Cultural Studies, International Christian University)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来

研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第4次研究会

江戸时代女性的修养训练

报告者: 谷村 玲子(国际基督教大学亚洲文化研究所研究员)

日期: 2014年12月12日(星期五) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 横山 泰子(法政大学国际日本学研究所所员、理工学部教授)

由于江戸时代的女性文化根据各自的身份而异, 所以

捕捉这一时代女性的整体形象并不容易。但是包括女性教育和初等教育的书籍在内, 江戸时代面向女性出版的书籍按照出版年月的区别来算总共超过了三千种。这其中也有以超越武士、市民、富农等身份的人为潜在读者的书籍。本次报告提取了面向女性书籍中关于各项技艺·修养训练的相关记述, 对各项技艺的变化以及修养训练的目的进行了探讨。

武士在将三味线蔑称为“淫声”的同时, 对于市民出身的近侍使女又要求她们懂得三味线音乐的技能。在记述三味线的书籍中, 可以看到这样自相矛盾的内容。此外, 作为武士文化的茶道, 也是侍奉武士的使女们所注重的修养训练。希望成为近侍使女的女性与上述书籍的读者相吻合这一现象可以看出, 这些书籍描述了江戸时代能助其成为超越身份的理想女性的各项技艺。而近侍使女侍奉武士的场合, 又发挥了形成理想女性的作用。

【执笔者: 谷村 玲子(国际基督教大学亚洲文化研究所研究员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제4회 연구회

에도시대 여성의 예능 수련

보고자: 다니무라 레이코(谷村 玲子, 국제기독교대학교 아시아문화연구소 연구원)

일시: 2014년 12월 12일(금) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 요코야마 야스코(横山 泰子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 이공학부 교수)

에도시대의 여성 문화는 신분에 따라 다르기 때문에 이 시대의 총체적인 여성상을 파악하기는 어렵다. 그러나 여훈물(女訓物: 여자에 대한 교훈서)과 왕래물(往来物: 서당용 교과서의 총칭)을 합치면 에도시대에 간행된 여성용 간행본은 간행년별로 3천 종이 넘는다. 이 중에

는 무사, 상인, 부농과 신분을 초월한 독자를 염두에 둔 것도 있다. 본 발표에서는 여성용 간행본에 기술된 여성의 여러가지 예능과 예능 수련에 관련된 기술을 발췌해 여러가지 예능의 시대적 변화와 수련 목적을 고찰하였다.

무가(武家)에서는 샤미센을 “음탕한 소리”라고 폄하하면서도 서민의 딸이 무가의 하녀로서 봉공하기 위해서는 샤미센을 연주할 줄 알아야 했다. 간행본에 나타난 샤미센에 대한 기술에서도 그러한 상반된 내용을 볼 수 있다. 무가의 문화였던 다도 또한 무가에서 하녀 봉공을 하는 처녀들에게 권장되는 항목이었다. 하녀 봉공을 지원하려는 처녀들이 간행본을 읽는 독자와 일치한다는 점에서, 간행본은 에도시대에 신분을 초월해 이상적인 여성이 되는데 필요한 여러가지 예능을 다루었다고 말할 수 있을 것이다. 또한 무가에서의 하녀 봉공은 이상적인 여성이 형성되는 장으로서 기능을 했다.

【기사집필: 다니무라 레이코

(국제기독교대학교 아시아문화연구소 연구원)】

第 5 回研究会

女が歴史を詠むとき

—近世女性歌人と日本意識—

- 報告者：田中 仁（学習院大学文学部日本語日本文学科助教）
- 日 時：2015 年 1 月 30 日（金）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 19 階 D 会議室
- 司 会：小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

江戸時代に活躍した女性歌人の多くは男性の国学者や歌人に師事するという形で歌の詠み方を身につけ、実作に臨んでいた。例えば、江戸時代中期に活躍した賀茂真淵は、女性の門人に宛てた書簡において、「古今より源氏までの間のもの、古今六帖・大和物かたり・三十六人歌仙家集など御覧候て御よみ候へかし。必後世の題歌のみあつめ候を御覧候而は歌になり不申候」（「某月某日森繁子宛書簡」（年代不明））とか「すべて歌てふものは、打となへたるさまやすらかに、け高きをよしとし、巧みのおもしろきをば次とす。（略）ただ古今歌集を朝夕に見て、それが中にもなだらかにて、ことわりの明らかなるさまを、われもかく様によまんとねがひて、よみうつし給へ。」（「御かたがたの君たちへ書簡」（年代不明））などと作歌指導をしている。「後世の題歌」に対して否定的な意見を述べつつ、『古今集』や『源氏物語』の引歌などを手本にするよう勧めているのである。

一方、真淵門下から出た江戸派の歌人たちは、『古今集』を尊重し、題詠にも積極的に取り組むようになるが、みやびを志向したこの時期の女性歌人の和歌において目立った形での日本意識の反映は見られない。とくに和歌において日本意識が先鋭化し始めたのは江戸時代後期の詠史和歌が流行し始めた時期であると考えられる。当時、歌壇では、歴史上の事件や人物を題材とする詠史和歌がさかんに詠まれるようになり、江戸派、鈴屋派、桂園派などの歌風・門流による派閥を越えた全歌壇的な流行現象となっていた。古学が浸透したことで自国の歴史への関心が高まったこと、そして、当時の人々が海外の国々に意識を向けるようになったことなどがその要因として挙げられるだろう。大田垣蓮月、高島式部、若江薫子などをはじめとして、幕末の激動期を生きた女性歌人たちも詠史和歌を詠んでいるが、それらの内容はいずれも君臣間の忠誠を褒め称えたり、大義のための戦いで壮烈な最期を遂げた人物に同情共感したりするような詠嘆的なものであった。そこに同時代の男性が詠んだ詠史和歌と内容的にはほとんど差異は認められない。ただし、みやびの要素が背景化するとともに、日本意識がより強調される傾向にあることは注目される。

明治維新以降、明治天皇が和歌をこよなく愛好したことは夙に知られている。明治宮中における和歌とそれに関わる職掌・儀礼などがより一層重要な位置を占めるようになり、明治 2 年 6 月以降は正月御会始とは別に、月次歌会が催されるようになる。また、明治天

皇は毎日のように近侍する人々に題を与えて、四季題のみならず詠史題の和歌も詠ませたと伝えられる。明治天皇が詠史和歌に関心を持つきっかけを作ったと思われるのが、幕末から明治にかけて活躍した桂園派歌人・渡忠秋（1811～1881）である。師の香川景樹の没後、桂園派歌壇の発展に尽力した忠秋は、維新後は自身が仕えていた三条実美の庇護を受けつつ高崎正風ら薩摩藩の桂園派歌人も親しく交流した。さらに明治 7 年 4 月から明治 9 年 9 月まで宮内省歌道御用掛として出仕し、明治天皇に対して講書始や和歌指南などを担当している。また、忠秋は日頃から詠史和歌を好んで詠んでおり、自作の詠史和歌を集めた『読史有感集』（明治 6 年刊）を、明治天皇に献上していることにも注目しておきたい。同書の特徴としては「魯西亜 伯徳球（＝ピョートル大帝）」や「仏朗西 那勃列翁（＝ナポレオン）」といった西欧の歴史上の人物とその事績を和歌に詠んでいる点が挙げられる。それまで中国の人物を詠んだ詠史和歌は存在したが、西欧の人物が和歌に詠まれるのは極めて稀であった。

その後、明治宮中で詠まれた詠史和歌を編集した『内外詠史歌集』（税所敦子編、明治 28 年刊）や明治 36 年刊行の『明治才媛歌集』（下田歌子編）には「拿破崙（＝ナポレオン）」、「華盛頓（＝ワシントン）」のほか、「如安（＝ジャンヌダルク）」、「徐世寶（＝ジョセフィーヌ）」などの西欧の女性を詠んだものも収録されている。とくに、後者の編者である下田歌子は女官時代には昭憲皇后から和歌の才を高く評価され、その後は女性教育の分野でも活躍した人物である。『明治才媛歌集』の場合、単に詠史和歌を集めただけでなく、和歌ともにそれぞれの人物に関する略歴や逸話も付記されており、そこに道徳的・歴史的教育的効果をも期待しているものと考えられる。

詠史和歌は幕末の政情不安と尊王攘夷思想の高まりとともに流行の最盛期を迎えたが、明治の文明開化にともなって物心両面の西欧化が進むと、西欧の歴史上の人物とその事績まで題材が拡がりを見せることになる。とくに明治の女性歌人たちは西欧の歴史上の女性を歌に詠むことによって、自らが「日本」の「女性」であることを再認識（あるいは相対化）する視点を獲得したとも言えるのではないだろうか。

【記事執筆：

田中 仁（学習院大学文学部日本語日本文学科助教）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

5th Research Meeting

Women Composing on History: Female Poets of the Pre-modern Period and Japan-consciousness

Speaker: Hitoshi Tanaka (Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Letters, Gakushuin University)
 Date: Friday, 30 January 2015, 18:30-20:30
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 19F Conference Room D
 Chair: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

In Waka poetry, Japan-consciousness peaked dur-

ing the late Edo Period with the trend for eishi waka (poetry on the epics). Eishi waka by female poets who lived through the great transitional period of Bakumatsu (end of the Edo Period) are almost all expressions of admiration for the loyalty between lord and vassal, or sympathy for those who showed acts of ultimate bravery in the wars fought for the greater peace. There is, then, very little difference in content from the eishi waka composed by men at this time.

After the Meiji Restoration, the Waka-loving Emperor Meiji enjoyed having Waka composed on epic themes by his courtiers. They were compiled in Naigai eishi kashu (Collected poems on epics of home and abroad) and Meiji saien kashu (Meiji collected poems on great women) etc., which included poems on Western women such as Joan of Arc and Empress Joséphine. In particular, female poets chose to compose poems on Western historical women, which, we might say, shows their ability to reaffirm (or, relativise) their own position as “women” of “Japan”.

Report by: Hitoshi Tanaka (Assistant Professor, Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Letters, Gakushuin University)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来

研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第5次研究会

女性吟咏历史之时

—近世女性和歌诗人与日本意识

报告者: 田中 仁(学习院大学文学部日本語日本文学科助教)

日期: 2015年1月30日(星期五) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦19层 D会议室

主持: 小林 芙美子(法政大学国际日本学研究所)

员、文学部教授)

和歌中日本意识的尖锐化是从江户时代后期咏史和歌流行的时期开始的。生活在幕末剧变期的女性和歌诗人所创作的咏史和歌,几乎都是称颂君臣之间的忠诚、同情为大义而壮烈牺牲的人物之类的咏叹。就内容而言一般不认为和同时代男性诗人的作品有差异。

明治维新以后,极为喜爱和歌的明治天皇经常让近侍的人吟咏历史题材的和歌,将这些和歌编汇而成的《内外咏史歌集》、《明治才媛歌集》等还收录了吟咏圣女贞德、约瑟芬皇后等西欧女性的作品。明治的女性和歌诗人通过吟咏西欧历史上的女性,实现了对自己是“日本”的“女性”这一事实的重新(或相对化)认识。

【执笔者:田中 仁(学习院大学文学部日本語日本文学科助教)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제5회 동아시아문화연구회

여성이 역사를 읊을 때

—근세 여성 시인과 일본의식—

보고자: 다나카 히토시(田中 仁, 가쿠슈인(学习院)대학교 문학부 일본어일본문학과 조교수)

일시: 2015년 1월 30일(금) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 19층 D회의실

사회: 고바야시 후미코(小林 芙美子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

와카(和歌)에서 일본의식이 두드러지게 나타난 것은 에도(江戸)시대 후기의 에이시(詠史) 와카가 유행했던 시기이다. 에도 바쿠후(幕府) 말기의 격동기를 살았던 여성 시인들이 읊었던 에이시 와카는 모두 군신 간의 충성을 칭송하거나 대의를 위해 전투에서 장렬한 최후를 맞이한 인물을 동정하고 공감하는 영탄(詠嘆)적인 것으로, 동시대의 남성인 읊은 에이시 와카와 내용 면에 있어서는 거의 차이가 없다.

메이지(明治)유신 이후 와카를 각별히 사랑했던 메이지 덴노(天皇)는 에이시를 주제로 한 와카를 신하들에게 자주 읊어보라고 했는데, 그 와카들을 편집한 『나이

가이에이시가슈(内外詠史歌集)』와 『메이지사이엔가슈(明治才媛歌集)』에는 간 다르크와 조제핀 등 서구 여성에 대해 읊은 와카도 포함되어 있다. 특히 메이지 시대의 여성 시인들은 서구 역사상에 나타난 여성을 노래로 읊으면서 스스로 ‘일본의 ‘여성’임을 재인식(또는 상대화)하는 시각을 얻게 되었다고도 말할 수 있을 것이다.

【기사 집필: 다나카 히토시
 (가쿠슈인 대학교 문학부 일본어일본문학과 조교수)】



報告者:田中 仁氏(学习院大学文学部日本語日本文学科助教)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年～平成26年)
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来
研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

第7回東アジア文化研究会

日本意識の変容—漫画・アニメの中国受容を通して

- 報告者：呉端(京都フォーラム研究員)
- 日時：2014年11月5日(水) 18:30～20:30
- 会場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー25階B会議室
- 司会：王敏(法政大学国際日本学研究所専任所員、教授)

12世紀宋代の随筆《容齋五筆》(著者洪萬)の中で、水鳥が魚を探すために水面を泳ぎながら、嘴で水面に自由に描く模様を「漫画」と言い、この水鳥を漫画者と呼んでいる。この表現が示すように、アニメ・漫画の精神とは、無心であり、無限の空間と時間における物語を自由自在に直感で描くことではないだろうか。

中国は、1980年代の《鉄腕アトム》の放送以来、30年にわたって日本の漫画、アニメの影響を受け、「漫画、アニメの時代」(動漫画時代)に入り、人々は文字によって価値判断する習慣から、絵と動画を見ながら、ものを考え、意味を理解する環境に慣れていった。中国の漫画市場は、日本の漫画とアニメが90%以上を占めている。ある調査報告の結論によると、現代中国の青少年は、日本の漫画・アニメが作った環境(仮想空間)の中で育って成長していると言えるという。では、なぜ、日中両国の政治環境、国民感情の変化にもかかわらず、世代を超えて、中国の若者がこうした風雨に負けず、己の感情にも負けず、30年間ずっと日本の「動漫画」を愛しつづけてきたのだろうか。

《中国青少年のアニメに対する調査》によると、90%の人は漫画・アニメが好きであり、その中で、無条件に支持する人は80%に達し、アニメから良い影響を受けたと答えを出した人も80%であった。好きなアニメの登場人物のランキングでは、上位20人中、19人が日本のアニメの人物で、残りの一人は孫悟空であった。中国では、漫画とは、日本の漫画の代名詞であり、若者で漫画のことを知らないのは変わり者と見られるほどである。

中国の若者をこれほど惹きつけるものはなにか。その一つに、日本の漫画、アニメに通底している「もののあわれを知る」心があるのではないだろうか。日本の漫画のストーリーの多くは、近代化の合理的な規制、思考を離れ、自然の神々の趣、超越的な境と人間生活の関係、人間の真情を自然の靈性とともを守りつづける多次元の宇宙が明白に表現されている。この「もののあわれ」は、中国の伝統社会における人間中心主義、あるいは生命の道徳性の「漢意」(からごころ)とは違って、万物自然とともにある、普通の生活者の人間像を現わしている。「もののあわれ」の漫画・アニメに宿る人間の本質と、中国の若者が、身体で、そして生活体験の中で実感した人間的なもの、社会的、自然的なものが一致し、通じあえるという感覚こそが、日本の「動漫画」への支持を内から支える力なのではないだろうか。例えば、少年と妖怪の友人をテーマにし

た《夏目友人帳》というアニメの中の「もののあわれ」は、中国の若者を魅了しており、その好評は、数年間にわたって連続一位を占めている。

また、日本の漫画・アニメの特徴は、政治的、経済的に組織化された日本ではなく、文化的、人間的、感情的、生活的、生命的観点から表現された、深層的で、多次元の日本観を創出しているところにある。「動漫画」のストーリーが展開される空間では、生命、友人、家族、学校、商店街、地域社会等が良く描かれており、国家は抽象化され、人種、民族といった概念も薄い。「動漫画」の時間領域は、過去、現在、未来、平行宇宙、生と死を超え、そこには、精霊、動物、植物といった、あらゆる地球上の生命体が登場し、はるか生命誌の宇宙にまで拡大していく。未知を既知にする、いわゆる常識を超えて、既知を未知へと、想像の領域を広げていくことで、若い世代の主人公の意識を涵養し、日本の漫画・アニメの世界によって、いわば、「感物知情の心」としての日本観が形成されている。

こうした日本のアニメに親しむ中国の青少年は、世論の社会調査結果とは異なり、国家としての日本、また、日本人という国民としてではなく、アニメの中で、自然的、靈性的、生活的、心と心のふれあいを認知することで、国家や民族といった違いを超えた、人類の共進に寄与する、生命観的認識を獲得しているのではないだろうか。

日本の漫画の原点は12-13世紀の〈鳥獣戯画〉にある。擬人化された鳥獣によって生命の意義を現わすことは、中国の脱鳥獣による人間中心主義と異なった世界観である。《論語・微子》で孔子は「鳥や獣とは同じ仲間にはなれない。わたしは、この人間たちと一緒にいるのなら、わたしも改めようとはしない」と語っている。

孟子の「惻隱の心は仁の端(始まり)なり」の説は、いわば「人のあわれ」を示したものと言えよう。日本の漫画・アニメの「もののあわれ」の思想と「人のあわれ」の風土が融合し、このような「あわれ」を感じあう優しさの環境の中で育まれる、分業、分別のない「想像/創造の共同体」(白石さや)によって、人間と自然の本来のあり方である「大地性の回復」(鈴木大拙)が可能となり、近代国家・国民の形成過程による対立を解く道が開かれていくのではないだろうか。

【記事執筆：呉端(京都フォーラム研究員)】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

7th East Asian Culture Research Meeting

Changes in Japan-consciousness: Through the Acceptance of Manga and Animation in China

Speaker: Duan Wu (Researcher, Kyoto Forum)

Date: Wednesday, 5 November 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The youth of China today grows up in the world (virtual space) of Japanese manga and animation. The reason for their popularity is considered to be the “sense

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来

研究方法③“‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第7次东亚文化研究会

对日认识的变化 —以漫画·动画片在中国的吸收为例

报告者: 吴端(京都论坛研究员)

日期: 2014年11月5日(星期三) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持: 王敏(法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

现代中国的青少年正在日本的漫画·动画片的环境(假

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제7회 동아시아문화연구회

일본의식의 수용 —만화·애니메이션의 중국 수용을 통해

보고자: 오 토완(吳端, 교토포럼 연구원)

일시: 2014년 11월 5일(수) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사회: 왕민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구위원, 교수)

현대 중국의 청소년은 일본의 만화·애니메이션 환경(가상공간) 속에서 성장하고 있다. 그 인기는 일본의 만화·애니메이션에 깔려있는 ‘사물을 애뜻히 여기는’ 마음에 있다고 생각된다. 이 사상과, 중국의 젊은이가 생활 속에서 실감한 인간적인 면, 자연적인 면이 일치하고 서로 통하는 느낌이야말로 일본 애니메이션의 인기를 지탱하는 힘이 되는 것은 아닐까.

또한, 일본의 만화·애니메이션에서 표현되는 일본인관은 문화적, 인간적, 생명적 관점에서 그려져 있으며 이것을 보고 자란 중국의 청소년은 국가적, 민족적 차이를 초월해 인류가 서로 통하는 생명관적 인식을 획득하고 있다.

of pathos (mono no aware)” that underlies Japanese manga and animation. This “pathos” thinking combines with the real feelings related to humankind and nature that young Chinese people experience in their lives. This sense of connectedness itself, then, would seem to support the popularity for Japanese animation from within.

Also, the image of Japanese people expressed in Japanese manga and animation is portrayed from a cultural, humanistic, life-centred perspective, and the Chinese youth that grows up watching these gains an understanding of a view of life that connects all humans, and transcends national and ethnic differences.

Mencius’ saying “Pity is akin to love” that expresses the “pathos of humans”, and the thought behind the “sense of pathos” of Japanese manga and animation, together form an environment of benevolence that nurtures this imaginary community – that is without division or judgement. If this “created” community then facilitates a “return to Mother Nature” - to the original ways of humans and nature - this might open the path to solving conflict found in the formation of the modern nation state.

Report by: Duan Wu (Researcher, Kyoto Forum)

想空间)中成长。日本动漫如此受欢迎的原因就在于,“懂得伤感怀物”的想法根植于日本的动漫。这一思想与中国的年轻人在实际生活体验中所感受到的人性、自然性的东西是一致的,这种相通的感觉正是日本动漫受欢迎的内在支持力。

此外,日本动漫所表现出来的日本人观,是从文化、人类、生命的观点出发所描绘的,看着这样的动漫长大的中国的青少年因而也就能够获得,超越国家与民族差异的人类所共通的生命观认识。

在“恻隐之心、仁之端也”(孟子)所揭示的“伤感怀人”与日本动漫的“伤感怀物”相融合的环境里,形成了没有分工与分别的想象/创造共同体。通过这样的共同体,如果“大地性的复苏”这一人与自然原本所应有的姿态能够成为可能的话,消除近代国家·国民形成过程中所产生的对立的道路也就打开了。

【执笔者: 吴端(京都论坛研究员)】

맹자의 ‘측은지심인지단야(恻隱之心仁之端也)’에서 말하는 ‘사물을 애뜻히 여기는 마음’과 일본 만화·애니메이션의 ‘사물을 애뜻히 여기는 마음’이 융합된 좋은 환경에서 성장하고, 자유로운 상상/창조의 공동체에 의해, 인간과 자연 본연의 모습인 ‘대지성(大地性)의 회복’이 가능하게 된다면, 근대국가·국민의 형성과정에서 대립을 풀어나가는 길은 열릴 것이다.

【기사집필: 오 토완(교토포럼 연구원)】



報告者: 吳端氏(京都フォーラム研究員)

第8回東アジア文化研究会

再考・世界史の中の幕末・維新

- 報告者：南塚 信吾（法政大学国際文化学部名誉教授）
- 日 時：2014年12月17日（水）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館 2階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

「日本史」「世界史」という二分法で描かれる幕末・維新时期は説得的ではない。幕末・維新は世界史そのものの一部として論ずる必要がある。ここでは、いわば「ゴム風船」のように、《世界のどこかの部分で緊張が高まれば、ほかの部分で緊張が緩和される》という関係を意識しながら、考えてみたい。

18世紀の末において、産業革命はイギリス内在的にではなく、世界的関係の中でアジアからの「挑戦」を受けて生じた。この産業革命のための政治的条件の準備がフランス革命に代表される「ブルジョワ革命」であった。こうして19世紀の初めの数十年に「二重革命」の時代を経た西ヨーロッパは、世界各地に資本主義的な侵出を進めた。しかし、対アジア貿易には障害があった。イギリスの綿製品は中国市場にはアクセスできなかった。そこでアヘンが活用された。このアヘン貿易は中国内部での反発を呼び、それが「アヘン戦争」へと発展するのである。

アヘン戦争は、大きく言えば、イギリスを代表とするヨーロッパのアジア進出へのアジアの抵抗の戦争であった。世界全体の緊張関係が「アヘン戦争」に集中した。そして、アヘン戦争の結末は、中国側にとっての深刻な不平等条約であった。このような「アヘン戦争」は、ヨーロッパにおいては「城内和平」をもたらした。列強間のウィーン体制下の緊張が緩んで、1840年代前半のいわゆる「三月前期」の改革期を迎えた。フランス革命後の「市民革命」の原理（ネイションも含め）がヨーロッパに浸透した。

「アヘン戦争」が終結すると、緊張関係は、ふたたびヨーロッパへ移動した。「三月前期」の「矛盾」の帰結として、1848年に大陸ヨーロッパ各地での革命が生じた。この「諸民族の春」には封建制の打破と民族的課題の解決が求められ、農民解放、議会設置、軍隊改革、検閲廃止などが求められた。このようなヨーロッパでの緊張は、アジアでの緊張緩和をもたらした。「アヘン戦争」後に英仏がすぐに日本へ軍事的に迫らなかったのはこうした関係によるのであった。その間に、日本においては、「アヘン戦争」の教訓が速やかに学ばれ、幕府や藩での改革が始まり、対外政策の見直しが行われた。対外政策の見直しは、蘭学者、洋学者らによる海外情報の提供と相まっていた。こうして、列強がヨーロッパの事態に専念している間に、日本は世界情勢を知るゆとりを得、その結果が開国交渉に反映する。

1848年革命が抑えられると、世界の緊張関係は、

バルカンへと移動し、それが「クリミア戦争」となる。1853－56年の戦争は、ほとんどのヨーロッパ列強が巻き込まれ、太平洋側のロシア極東にも波及した世界戦争であった。この戦争の間に、アジアでは緊張が緩和し列強（英仏）の活動は制約的となる。その間に、中国では「太平天国運動」（1851年－）、日本では「黒船」による「開国」が起こるのである。「開国」について見れば、露英仏は、クリミア戦争のため、本格的な対日交渉はできず、結局、アメリカが中心に「開国」を迫る。幕府はクリミア戦争を巡る事情を理解していて、外交交渉に活用した。

クリミア戦争が終わると、緊張関係はまたアジアへ向かう。戦後、英露の対立がペルシアからインド方面へ移行する中で、インド反乱が起こり、続いてベトナム大抵抗やアロー戦争が起こり、いわば「アジアの大反乱」（1856－68年）の時期を迎える。この「アジアの大反乱」が世界の他の地域での緊張緩和をもたらす。

まずこの時期にヨーロッパでは緊張が緩和されて、経済的には60年代の「創業熱」、政治的にも「混迷の60年代」ないしは「会議外交」の時代を迎える。また、「アジアの大反乱」にヨーロッパが巻き込まれている間に、列強の大きな介入なしに、南北戦争、ロシアの大改革が起こった。他方、日本はこの「大反乱」に側面支援を受けて、「開国」「維新」への道を進む。「開国」交渉は英仏ではなく、米露の主導で進められ、幕府も世界情勢を把握するゆとりを持ちつつ、それなりの開国交渉を行い、外国の重大な武力介入なしに「開国」した。1858年の諸条約は「不平等条約」ではあるが、中国の場合との違いは大きかった。この後、日本は渡米使節団、渡欧使節団、各藩からの留学、そして各種の翻訳活動によって対外認識をいっそう進展させる。このように「アジアの大反乱」の間に、日本は列強の介入なしに「開国・開港」し、同期にアメリカとロシアは大きな変革を実現したのである。

「アジアの大反乱」が終わったところでヨーロッパの再編の激動、つまり「国民国家」形成が起こる。それは世界史の中で進むのであり、ヨーロッパ内部の自立的発展の結果ではなかった。そして、このヨーロッパの再編の激動の時期にアジアでは相対的平静がやってきた。そういう中で「明治維新」が実現したのである。

【記事執筆：南塚 信吾（法政大学国際文化学部名誉教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

8th East Asian Culture Research Meeting

Rethinking the End of the Edo Period and the Restoration Period from the Aspect of World History

Speaker: Shingo Minamizuka (Professor Emeritus, Hosei University Faculty of Intercultural Communication)

Date: Wednesday, 17 December 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The history of Bakumatsu – Ishin (End of the Edo

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来

研究方法③“‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第8次东亚文化研究会

再考·世界史中的幕末·维新

报告者: 南冢 信吾(法政大学国际文化学部名誉教授)

日期: 2014年12月17日(星期三) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 王 敏(法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

将幕末·维新的历史仅仅放在日本史中进行一国史的说明是不可行的。与此同时, 将幕末·维新仅仅进行国际

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제8회 동아시아문화연구회

再考·세계사 속의 바쿠후 말기·유신

보고자: 미나미즈카 신고(南塚 信吾, 호세이대학교 국제문화학부 명예교수)

일시: 2014년 12월 17일(수) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학 세미나실

사회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

바쿠후(幕府) 말기·유신(維新)의 역사는 일본역사 속에서 한 나라의 역사로만은 설명할 수 없다. 그렇다고 해서 바쿠후 말기·유신의 역사를 국제적으로 ‘비교’하는 것만으로 설명되지 않으며, 같은 맥락에서 바쿠후 말기·유신을 ‘국제적 계기’나 ‘국제환경’에 대입한다 해도 설명할 수 없다. 바쿠후 말기·유신은 세계사 그 자체의 일부로서 논할 필요가 있다. 그러면 어떻게 논해야 할 것인가. 이 연구에서 제안하는 것은 바쿠후 말기·유신을 철저하게 ‘관계’, ‘연결’에 중점을 두고 논하는 것이다. 이를 논할 때는 이른바 ‘고무풍선’ 원리로, “전세계의 어느 지역에서 긴장이 고조되면 다른 지역이 완화된다. 그리고

Period – Meiji Restoration) cannot be explained monotonically within Japanese history alone. Neither will it do merely to “compare” the Bakumatsu-Ishin Periods internationally. Similarly, we cannot explain the period merely by adding perspectives of “international opportunity” or “the international environment”. We need to discuss Bakumatsu-Ishin as a part of world history. In what way, then, should we discuss it? My proposal was a discussion of “connections” and “ties” throughout the Bakumatsu-Ishin Periods. As with the “rubber balloon” theory, “If tension heightens in one part of the world, then tension eases in another. And if tension eases in one part, it necessarily heightens in another” (Eguchi). With such a connection in mind, I attempted to describe the era in pursuit of “connections” and “ties”. I brought attention to the connection between, for example, the 1848 Revolution and “Bakumatsu”, the Crimean War and “Kaikoku (Open Door Policy)”, and the great revolts across Asia, including the Indian Rebellion, and “Ishin”.

Report by: Shingo Minamizuka (Professor Emeritus, Hosei University Faculty of Intercultural Communication)

性的“比较”也不足以说明问题。同样, 将幕末·维新仅仅放在“国际性契机”、“国际环境”等背景中进行解释也是行不通的。因而将幕末·维新作为世界史的一部分来讨论是很有必要的。那么, 究竟要如何来讨论呢。笔者有一个提案就是, 在完全彻底的“关系”和“关联”中来讨论幕末·维新。被称为“胶皮气球”的理论认为, “在世界的某一处出现紧张局面时, 其他部分的紧张关系就会得到缓和。而当世界的某一处的紧张局面得到缓和时, 其他地方必然会出现紧张局面”(江口)。在留意这样一种关系的同时, 对“关系”和“关联”进行探索, 就可以描绘出这一时期的面貌。比如, 可以尝试对1848年革命与“幕末”的关系, 克里米亚战争和“开国”的关系、印度民族起义等“亚洲革命风暴”与“维新”的关系进行关注。

【执笔者: 南冢 信吾(法政大学国际文化学部名誉教授)】

전 세계의 어디선가 긴장이 완화되면 반드시 다른 부분에서 긴장이 고조된다”(에구치(江口))는 관계를 의식하면서 ‘관계’, ‘연결’을 추적해 그 시기를 그려 보았다. 예를 들면 1848년 혁명과 ‘바쿠후 말기’의 관계, 크림 전쟁과 ‘개국’의 관계, 인도 반란 등 ‘아시아의 대반란’과 ‘유신’과의 관계를 주목해 보았다.

【기사집필: 미나미즈카 신고

(호세이대학교 국제문화학부 명예교수)】



右より: 南塚 信吾氏 (報告者)、王 敏氏 (司会者)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来
研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

第 9 回東アジア文化研究会

“日本現象”を追う一つの視座—人類の行方を見据えて—

- 報告者：足立原 貴（特定非営利活動法人 農業開発技術者協会・農道館理事長）
- 日 時：2015 年 1 月 28 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

1. 状況

「人類の歴史は」との問いかけに、「闘争の歴史」「移動の歴史」「発明・発見の歴史」「ものづくりの歴史」「都市の歴史・都市化の歴史」等々、先人たちはさまざまな知見を残していったが、ここで確認されねばならないのは、「異なる生物が、併存・共存している自然界の様相を観察してきた歴史」である。

観察してきた自然界に「絶滅危惧生物」を発見し、その保護に手を尽くすのは、「みんな同じであるほうがよい」とする一方に、「みんなそれぞれ異なっているほうがよい」という判断があるからだ。

人類が、自分たちもこの地球上に生き続けている生物の一種なのだ、と自覚すれば、いま人類世界は人類自身を「絶滅危惧生物」のリストに登録しなければならないような事態に追いこまれつつあるのではないか、との危機感を抱かせられる。

2. 暗影

「言語が異なる」「生活様式が異なる」まで許容し合っても、「思想が異なる」「宗教が異なる」となると、それぞれ継続されてきた相互のさまざまな「異なる・異なっている」を一切「拒否」し、その先の「抹殺」へ向かってしまう。この動向に歯止めがかけられなければ、人類を「絶滅危惧生物」のリストに登録しなければならないという話が「冗談」ではなくなる。

“冗談”にしてはならないとして課題にとり組む入り口は、これまで「進歩・発展」の手本とされてきた「現代先進国文明」の問い直しである。

現代の「先進国」と言われる国々の文明状況を通覧してみると、“工業化”“都市化”“基本的人権の尊重”

の軌跡が見えてくる。

“工業化”は「モノづくりのチエとチカラの推進」。“都市化”は「暮らしの便利さの追求」。“基本的人権の尊重”は「人はみんな自分の生き方を自分で決める自由と権利を持っている」として、思想・言論・信教の自由などを「法」で定めている。

三つの要件が満たされ、工業化が進んでいてモノが豊富。都市化が進んでいて生活が便利。基本的人権が尊重されていて自分の生き方を自分で決められる。となると、“理想郷”ではないか。だから中進国や途上国は先進国を追う。しかし、先進国は決して理想郷ではない。

モノがあふれるとともにコトがあふれている。とんでもないコト、なんともやりきれないコト、ゆるせないコト。便利さが満ちてくるとともに、その便利さゆえの思いもかけなかった不便が続出してきて日常生活を息苦しくさせ、生きる道を絶たれてしまうことさえある。

社会の混乱や体制の腐敗や人心の荒廃、先進技術を駆使する犯罪、生存基盤をゆるがす環境問題、それらを追っていくと、人々が生き続けていくためにあってはならないことで、「先進国」は、とんでもない「先進」になっていることに気づかせられる。

随所で現代文明の潮流を問い直し、次世代へつなげていく実践への不断の努力を続けなければ、先進国は人類滅亡の先進役になってしまう、と思ひ知らねばなるまい。

3. 異なっているままで

この国のこの時代に生まれ合わせ、一つの問題への



報告者：足立原 貴氏
（特定非営利活動法人 農業開発技術者協会・農道館理事長）



会場の様子

異なる対応策での対立を、不毛の対立に終わらせず、新たな方途へ進展させてきた事例に、私たちの場合を寸描したい。

国土の70パーセント余が山林の島国である日本の人工造林事業で「下草刈り」は欠かせない。その労務者激減対策に除草剤空中散布が実施され始めていた1974年夏、環境保全の視点から私たちは除草剤空中散布への猛反対運動を展開した。しかし、反対運動を「森林の育成」という大事の妨害に終わらせてしまっただけではない。そこで問題の根源は、機械化・化学化の進展に頼って身体労働の「手抜き」を進行させている文明の流れにあると見てとり、全国の若者たちへ呼びかけ、自分たちの身体を動かして造林地の草を刈る

運動を展開し、今日に至っている。

私たちは、相手とは異なる意見の表示に、ヘリコプターが飛び立つのを妨害したり墜落させようとしたり、除草剤の製造工場を爆破しようとしたのではない。除草剤を空中散布するような文明状況への異議申し立ての実践を遂行したのである。その現場は、平素の異なる日常性を脱した者たちが、共通の目標を立てて協力し合えることを示す「証」となった。

異なる者が異なっているまま共存をはかるそれぞれの「文明批評の実践」が人類の未来を描く。

【記事執筆：足立原 貴

(特定非営利活動法人 農業開発技術者協会・農道館理事長)】

新刊案内2

国際日本学叢書 21

2013年アルザス・シンポジウム報告 『日本のアイデンティティとアジア』

国際日本学叢書 21

- 『日本のアイデンティティとアジア』刊行にあたって……………安孫子 信
 WAR AND PEACE IN THE 20TH CENTURY In Europe, Japan and Asia……………André KLEIN
 一中国学者の「日本の地位とアジア」認識……………湯 重南
 L'Extrême-Orient ou le Japon dans l'Asie, invention de concepts métageographiques……………Philippe PELLETIER
 De l'Orient à l'Asie du Nord-Est : vers un retour du Japon en Asie ?……………Samuel GUEX
 The role of Japan on the Asian continent: Soviet and post-Soviet interpretations……………Karine MARANDJIAN
 石橋湛山のアジア論の構造と特徴——小日本主義と「東洋の盟主」の概念を中心に……………鈴木 裕輔
 明治日本にとってのアジア……………川田 順造
 日本民族文化の形成におけるアジア諸民族文化との関わり合い
 ——20世紀における日本民族学・考古学の学説を振り返って——……………ヨーゼフ・クライナー
 We All Share Rice and Rice Paddies……………Emiko OHNUKI-TIERNEY
 Asian Identities of the Japanese Through Time……………Emiko OHNUKI-TIERNEY
 「倭」から「日本」へ 日本のアイデンティティとしての二つの国号……………井上 亘
 日本の禹王文化について——「大禹戒酒防微図」の日本伝来の略脈を垣間見る……………王 敏 (翻訳：及川 茜)
 哲学は日本を西洋と東洋の間のどこに位置づけるのか——中江兆民・福沢諭吉・西周一……………安孫子 信
 徳川政治体制と朱子学……………星野 勉
 Trimsika Translation in East Asia……………KAMIGAITO Kenichi
 « Les recherches scientifiques sur la théorie de la musique orientale » de Tanabe Hisao :
 étude sur la musicologie japonaise des années 1920……………SUZUKI Seiko
 能楽は日本固有の芸能か——能楽の起源をめぐる言説の変遷——……………宮本 圭造

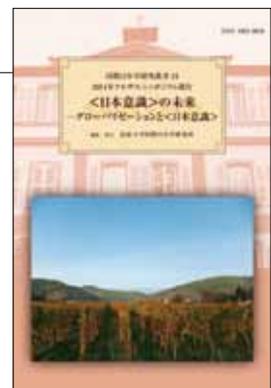


国際日本学叢書 24

2014年アルザス・シンポジウム報告 『<日本意識>の未来—グローバル化と<日本意識>』

国際日本学叢書 24

- 『<日本意識>の未来—グローバル化と<日本意識>』刊行にあたって……………安孫子 信
 We just want to be, staying here …, a biography of a marginal community's school……………Johannes WILHELM
 『遠野物語』と富岡製糸場の世界遺産登録をめぐる
 ～日中共通の蚕文化のデータベースに基づく考察～……………王 敏
 グローバリゼーションと「風土」……………星野 勉
 座談会「近代の超克」をめぐる……………安孫子 信
 新しい可塑的共同体構築の基礎理論としての種の論理……………黒田 昭信
 Japan in Search of Its New Identity in the Globalization Era
 (A Comparative Analysis of Japanese and Russian Identities in 21st Century)……………Sergey V. CHUGROV
 The complex of victimisation as a part of Japan's postwar identity……………Dmitry STRELTSOV
 日本古代の「グローバル化」の真相—律令国家・遣唐使と国風文化—……………小口 雅史
 石橋湛山による分断的勢力としてのイデオロギーへの批判……………鈴木 裕輔
 植物資源の多面的利用と「見立て」の哲学：未来の世界への日本文化の貢献の可能性を探る……………川田 順造
 On Things to Come: What contemporary Japanese architecture should be like……………Benoît JACQUET
 Robots, Technical Individuals and Systems……………Paul DUMOUCHEL
 What about the Japanese future?……………Josef KYBURZ



MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

9th East Asian Culture Research Meeting A Viewpoint in Search of a “Japan Phenomenon”: Looking Ahead to the Future of Humans

Speaker: Toru Adachihara (President, NPO Association of Agriculture Development Engineers)
Date: Wednesday, 28 January 2015, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The civilised world of today brushes aside the diverse culture that was nurtured in human societies, and strives

for uniformalisation in the continuation of the whole human race through the “denial” of “difference”. In the midst of this torrent are the ever-increasing difficulties of co-existence, that transcends many national boundaries and different cultural spheres, but which focusses on the issue of human-world commonality.

It is increasingly hard to survive within one’s own cultural sphere, as knowledge and skills collected from within that one cultural sphere cannot be applied to these global conditions. Surely what we seek are ways to continue forever that co-existence having acknowledged the fact that differences will remain different?

If different people, things and practices are allowed to exist side by side in their diversity, they will use their knowledge and strengths in response to the current of uniformalisation, and knowledge and strengths will emerge that can respond to hitherto unimaginable situations.

One “Japan phenomenon” occurring in Japan in which we were involved is the “Kusakari jujugun (saviours of the forest)”, and I referred to it here as an example of “practical criticism of civilisation”.

Report by: Toru Adachihara (President, NPO Association of Agriculture Development Engineers)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来

研究方法③“‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”
第9次东亚文化研究会

追寻日本现象的一个视点 —看清人类的去向—

报告者: 足立原 贯 (特定非营利活动法人 农业开发技术者协会·农道馆理事长)

日期: 2015年1月28日(星期三) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

现代文明世界冲走了人类世界所孕育的多样化文

化, 并且通过“拒绝异类”来不断地在同化全人类的生存方式。在这样一种激流的漩涡中, 共存这一超越多样性境界以及异质文化圈的人类世界所共通的难题就会更加膨胀。

在这样一种世界格局之下, 到现在为止在单一文化圈内积累起来的智慧与方法已经不足以应付, 就连在各自的文化圈内生存下去都在变得更加困难。现在所需要的是, 在不同的东西按照原本就不同的方式生存下来的这一事实中, 寻找能够永久实现共存的途径。

不同的人 and 物和事保持不同的多样性共存下去, 就能够发挥应对同化激流的智慧和力量。就算是突然发生了超出想象的事情, 从中也会产生能够应对的智慧和力量。

笔者作为当事人, 也作为“文明批判的实践”, 对“割草十字军运动”这一正因为在日本所以产生的“日本现象”进行了思考。

【执笔者: 足立原 贯

(特定非营利活动法人 农业开发技术者协会·农道馆理事长)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제9회 동아시아문화연구회

“일본 현상”을 좇는 하나의 시점

—인류의 앞날을 내다보며—

보고자: 아다치하라 도루(足立原 貫, 특정비영리활동동법인 농업개발기술자협회·농도관(農道館)이사장)

일시: 2015년 1월 28일(수) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

인류 세계에 형성된 다양한 문화를 밀어내고 ‘다름’을 ‘거부’하면서 전 인류가 영위하는 삶이 일률적으로 되어 가는 듯한 현대 문명 세계. 그 거센 흐름 속에 다양한 경

계와 다른 문화권을 초월하여 인류 세계의 공통 과제로 삼아야 할 공존을 위한 난제가 쌓여가고 있다.

지금까지 하나의 문화권 안에 축적되어 온 지혜와 방법으로는 이러한 세계 상황에 대응할 수 없을 뿐만 아니라, 각각의 문화권에서 생존하는 것조차 어려워지고 있다. 지금 필요한 것은, 다른 것들이 그 모습 그대로 생존하는 것이 가능했다는 사실을 서로 확인하면서 그 공존이 영원히 지속되는 방안을 찾아내는 것이 아닐까.

‘다른’ 사람과 사물, 사건이 다양하게 서로 다른 모습 그대로 공존하고 있어야만 일률적으로 변해가는 거센 흐름에 대응할 수 있는 지혜와 힘도 발휘하게 될 것이며, 지금까지 생각지도 못했던 돌발사태가 일어나도 대응할 수 있는 지혜와 힘이 생겨날 것이다. 이번 연구회에서는 필자를 포함한 우리 협회가 직접 나서, “문명 비판의 실천”으로서 일본이었기에 가능했다는 “일본 현상(現象)”의 하나로 일컬어지고 있는 “풀베기 십자군 운동(草刈り十字軍運動)”을 예로 들어 생각해 본다.

【기사 집필: 아다치하라 도루

(특정비영리활동동법인 농업개발기술자협회·농도관 이사장)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年~平成26年)
国際日本学の方法に基づく<日本意識>の再検討—<日本意識>の過去・現在・未来
研究アプローチ③「<日本意識>の現在—東アジアから」

第10回東アジア文化研究会

最近の中国、日中関係について考える

● 報告者：谷野 作太郎(日中友好会館顧問、元駐中国大使)

● 日 時：2015年2月18日(水) 18:30~20:30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

● 司 会：王 敏(法政大学国際日本学研究所専任所員、教授)

一、二十世紀の国際社会(西側)の大きな課題は、あのソ連邦とどう向き合うか、ということだった。然らば二十一世紀の我々にとっての国際的な課題は何か。それは、諸事(政治、外交、社会)において異質な、そして透明さを欠いたまま軍事的に膨張を続ける中国(今や米国に次ぐ第二の軍事大国)とどう向き合っていくか、ということである。国際社会における相互依存関係が深まる中、中国の世界とのかわりの度合いは、かつてのソ連とは比べものにならない。

「諸事において異質な中国」を象徴する事例がある。四年前、当時の中国の政治のトップの一人、呉邦国全人代表委員長は「中国は五つのことをやらない」と述べた。それは、①多党制による政権交替 ②指導思想の多元化 ③三権分立と両院制 ④連邦制 ⑤私有制、この五つのことを中国は採用しない、ということである。そしてこの考えを温家宝総理(当時)も強く支持した。

このうち、とくに「三権分立」は採用しないということについて、中国のために本当にそれでよいのであろうか、と考える。その時々政権が国の運営、清廉さなどの面で暴走する、ハメをはずす、これをチェックする有効な仕組みこそが三権分立である。また、司法の独立が認められない、司法も(すべて、共産党が差配する)ということになると、例えば日中間の訴訟案件においても、その時々の日中関係の状況によって、司法の裁きも左右されかねないということになる。

もっとも、このようなやり方(“北京コンセンサス”)について、とくに未だ発展途上にある国については、こうしたやり方も悪くないではないかという見解もある。“ワシントン・コンセンサス”の否定、昨今の国際社会の状況(特定の宗教神をおとしめる、或いは一国の政治の最高指導者を残酷なやり方で殺すというストーリー、それを映画の主題にするといったことなど、私に言わせれば、これらは言論、表現の自由の枠を越えた言論による暴力である。もっともあの政権についての憤りの気持ちは私も共有するが)を見るにつけ、更には米国などにおける富の極端な偏在を知るにつけ、このような主張も一定の説得力を持つ。

二、三年前の秋、そして二年前の春、中国において、新しい政権、すなわち、習近平党総書記と李克強國務院総理のチームがスタートした。拡大する貧富の較差、深刻な環境問題、不正、腐敗の広がり、軍の肥大化、少数民族問題、そして社会保障制度が未熟な中にあるので、少子高齢化社会の到来など、数々の重い“お荷物”を背負ってのスタートである。他方、長年の懸案である“政治改革”(これをつき動かす“民主化”)は殆ん

ど進んでいない。

そのような中、習総書記は、「中華民族の偉大な復興の実現、富国強軍は“中国の夢”」と語り、自らへの権力の集中を図り、腐敗撲滅(“トラもハエも叩く”)に懸命である。しかし、その先にどのような中国を目指そうとしているのかが必ずしも見えてこない。むしろ、異なる意見を力をもって封じ込めようとする所作のみが目立つ昨今である。健全なナショナリズムの高揚は結構である。しかし、いささかひとりよがりな軍事力もふくめ、これ程巨大になった中国のリーダーの語り口としては、肩に力が入り過ぎとの感じがしないわけでもない。

三、中国及び中国新指導部への期待と要望

- (1) 国際社会の一員としての自覚と大国にふさわしい所作(国際協調の精神、国柄の透明性の向上、品格に裏づけられた自信)
- (2) そろそろ歴史の被害者意識(“中国は馬鹿にされてたまるか”)、国際社会に対する過度の猜疑心、いびつなナショナリズムから卒業せよ

四、日中、中日関係

先の北京における安倍総理と習近平総書記の出会い(二十五分間の会談)で、両国関係が長いトンネルを抜け出し、日中、中日関係に青空が広がった、ということでは決してない。ただ、中国のトップのリーダーが日本の総理と握手をしたということで、中国の側においてはその下僚たち(閣僚もふくめ)が残壕から出て来て、中日関係でポチポチ仕事を始めつつある。願わくば、折角ゆっくりと動き出した歯車を止めないで、加速させて欲しいと思う。

一中国側への要望：

- ① その時々々の両国の政治・外交関係を他の分野の関係(経済、青少年交流、地方都市交流、文化・芸術交流…)に及ぼさないで欲しい。
- ② 国交正常化以来の中日関係に対する検討と真摯な内省(中国としても間違っていたところはないか)の作業がなくもつばら「両国関係の悪化の原因の責任は挙げて日本側にあり」と叫ぶだけでは、日中関係の未来はない。

一日本側への要望：

- ① 政治の要路にある方々は「オウン・ゴール」を避けること(今年は五月のモスクワ、九月の北京と勝利記念国際行事がいろいろと予定されており、日本にとってなかなかつらい年である。)
- ② 若者たちのアジアの近現代史についての基本的知識の涵養(この面での日

本の若者たちの劣化は目を覆うばかりである。) ③国、民族の徳の錬磨、尊敬され頼られる日本に

五、日・中両国は四十三年前の関係正常化の原点に立ち返ろう

四十二年前、田中総理と周恩来総理は何を語り合い、何を終了したか。

それは、共同声明にも記されているように①両国の平和友好協力関係は、日、中の利益、アジアの利益、

世界の利益、②反覇権、③「歴史」を鑑として両国関係の未来を拓く、ということであった。

そして、そのためには、日、中それぞれ側の政治の領袖たちの強い意志と勇気、そして移ろい易い世論に流されない、おもねらない強い政治的リーダーシップが求められる。

【記事執筆：谷野 作太郎

(日中友好会館顧問、元駐中国大使)】



右より：谷野 作太郎 氏（報告者）、王 敏 氏（司会者）



会場の様子

新刊案内3

法政大学国際日本学研究所
研究成果報告集『国際日本学』第12号

研究成果報告

1919年前後における日中「アジア主義」の変容と分極の諸相…………… 尹 虎

近現代の芸術における芸術と科学の「内的な相互作用」について

…………… ガブリエル・デカマス（翻訳：鈴木 裕輔）

黒沢清の『トウキョウソナタ』再び生きるという問題についての変奏

…………… クレリア・ゼルニック（翻訳：岡村 民夫）

逸脱する人類学者——坪井正五郎と山口昌男…………… 川村 伸秀

若手研究者論文

『アルボミシュ』と幸若舞曲『百合若大臣』—影響関係をめぐる一試論—…… サイダ・ハルミルザエヴァ

宇宙観を巡っての仏教経典の再解釈—近代日本における浄土教の場合—…………… 清水 俊史

中島敦の南洋作品の形成における土方久功の影響——「鶏」を中心に——…………… 閻 瑜

研究アプローチ活動報告

…………… 小林 ふみ子, ヨーゼフ・クライナー, 王 敏, 安孫子 信, 小口 雅史

彙報



MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

10th East Asian Culture Research Meeting

Considering Current-day China, and Japan-China Relations

Speaker: Sakutaro Tanino (Adviser, Japan-China Friendship Association; Former Ambassador to People's Republic of China)

Date: Wednesday, 18 February 2015, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The issue for international society of the 20th century, as far as the West was concerned, was “How to confront the great military might of the Soviet Union (and its East-European satellites)”. Now, the Soviet Union having

collapsed, the big issue for 21st-century international society is how to face China -- that has become the military powerhouse second to the U.S., and whose politics, diplomacy, and society etc. is different from our own -- and how to form friendly and stable ties between us.

On Japan-China relations: despite recent talks between Prime Minister Abe and President Xi Jinping (which lasted 25 minutes), the two countries' relations are far from appearing out of the end of the long tunnel. Even though the wheels that have been put into motion have not stopped, it has been necessary for both sides to continue to adopt a careful approach.

Leaders of political factions in both countries should now look back to when relations began to normalise 43 years ago. The beginning of the normalisation of relations meant 1) peace and amity, and cooperative relations between Japan and China that benefitted both countries, Asia, and the world, 2) anti-hegemony, 3) using “history” as a model to lead the countries' relations towards a new future. However, for this to happen, we require great will and courage, and strong political leadership, from political leaders on both Japanese and Chinese sides.

Report by: Sakutaro Tanino (Adviser, Japan-China Friendship Association; Former Ambassador to People's Republic of China)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来

研究方法③“‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第10次东亚文化研究会

关于最近的中国、中日关系的思考

报告者: 谷野 作太郎(日中友好会馆顾问、前驻华大使)

日期: 2015年2月18日(星期三) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 王 敏(法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

对西方而言, 二十世纪国际社会的课题就是“如何面对拥有巨大军事力量的苏联(以及在其影响之下的东欧各

国)”。在苏联解体后二十一世纪的国际社会里, 中国在政治、外交、社会等方面与西方国家相比性质不同, 且又拥有仅次于美国的军事实力。如何面对中国、与中国保持良好而又安定的关系就成为了一个大课题。

关于中日关系, 习近平主席与安倍总理之前虽然在北京举行了会谈(二十五分钟), 但这并不足以使两国关系走出长期的低谷。为了让这好不容易转动起来的齿轮不停下来, 需要两国持续小心谨慎地应对。

两国的政治领袖应该再次回到四十三年前邦交正常化的原点上。所谓邦交正常化的原点就是: ①中日两国保持和平友好合作的关系是为了两国、为了亚洲、为了世界。②反对霸权。③以史为鉴、面向未来。为此, 需要中日双方的政治领袖们拥有很大的志向和勇气、以及高超的政治领导能力。

【执笔者: 谷野 作太郎(日中友好会馆顾问、前驻华大使)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제10회 동아시아문화연구회

최근 중국, 일·중 관계에 대해 생각하다

보고자: 다니노 사구타로(谷野 作太郎, 일중우호회관 고문, 전 주중대사)

일시: 2015년 2월 18일(수) 18:30~20:30

장소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 왕 민(王 敏, 호세이대학 국제일본학연구소 전 임연구소원, 교수)

20세기 국제 사회의 과제는, 서방에 있어 ‘거대한 군사력을 보유한 소련(그리고 그 영향 하에 있는 동유럽 국가)을 어떻게 대하느냐’하는 것이었다. 그 소련이 붕괴한 21세기 국제 사회에서의 커다란 과제는 정치, 외교, 사회 등에 있어 우리와는 다른, 그리고 지금은 세계에서

미국의 뒤를 이을 정도로 군사 대국이 된 중국에 어떻게 대응하며, 그 사이에서 어떻게 하면 안정적이고 양호한 관계를 맺어갈 것인가 하는 것이다.

일·중 관계에 대해서는 이전 베이징에서 아베(安倍) 총리와 시진핑(習近平) 국가주석 간의 회담(25분)이 있긴 했지만, 이것으로 양국 관계가 긴 터널을 빠져나왔다고는 볼 수 없다. 힘들게 움직이기 시작한 튼튼바퀴가 멈추지 않도록 하기 위해서라도 계속해서 양국의 신중한 대응이 필요하다.

양국 정치의 정상들은 지금 다시 한번 43년 전의 관계 정상화의 원점으로 되돌아가야 할 것이다. 즉 관계 정상화의 원점은 ①일·중 양국의 평화 우호 협력 관계는 양국을 위해, 아시아를 위해, 세계를 위해 ②만 배권 ③ ‘역사’를 귀감으로 양국 관계에 새로운 미래를 개척한다는 것이다. 그러나 그러기 위해서는 일·중 양측의 정치 지도자들에게 대담한 목표와 용기, 그리고 강력한 정치적 리더십이 요구된다.

【기사 집필: 다니노 사구타로

(일중우호회관 고문, 전 주중대사)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
 国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来
 研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

第 2 回勉強会

19 世紀日本における「作者」の諸相

- 報告者：ニコラ・モラール（ジュネーブ大学文学部東アジア研究所講師／日仏会館フランス事務所研究員）
- 対話者：中丸 宣明（法政大学文学部教授）
- 日 時：2014 年 12 月 19 日（金）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

今日、「作者」という概念からは一般的に「個性的な創作者」というイメージが喚起されるであろう。それはロマン主義の思想が現代に至るまで通念としていかに定着してきたかを物語っている。文化製品市場が拡大し、著作権侵害行為が増加する現代においても、文芸創作の美学・法的な基盤は揺るがず、むしろ逆に固まっていくようである。

西洋では、その近代的な作者概念の形成と崩壊が古くから研究者、評論家、作家たち自身の注目を集めたのである。「作者」概念は近代前衛（マラルメ、ヴァレリー、ブルースト、シュルレアリスム、ロシア・フォルマリズム、ニュークリティシズム、構造主義、ポスト構造主義など）によって徐々に非神聖化され、1960 年代後半になると、ロラン・バルトなどによってその死が宣言されるほどである。それ以来、「作者」という概念の歴史性が問われ、いつ頃から如何にして作者が文学作品の生産・流通・享受に中枢的な地位を得たかという課題が浮かび上がってきた。

日本の文学史を 19 世紀という枠組みで捉える意味は、まさに木板と写本を中心とした近世的パラダイムから、活版印刷による新しいメディア（新聞・雑誌など）が登場した近代的パラダイムへという転換が俯瞰できることにありと思われる。

本研究は、その問題意識を出発点に据えながら、美学（オリジナリティー）や法学（著作権）に限らず、文学（作者の自己表象）・社会学（作者の職業化）・哲学（個性の誕生）・経済学（作者の収入）など、様々な観点から、日本の 19 世紀的な「作者」象を検討することを目的とするが、今回の発表では、作者の図像学ともいえる分野に焦点を当てた。

寛政の改革を経て、全国出版市場の基盤が固まって初めて、山東京伝、曲亭馬琴、十返舎一九などのように、一種のプロ作家が現れると言われているが、彼らは出版市場の中で生き延びていくには、以前にもまして、自己宣伝を迫られている。作家のイメージ（抽象的な意味でも、具体的な意味でも）がますます重要な役割を果たすようになる。その流れで、作家の肖像に注目する意味は大きいと思われる。発表では、作家がいかに表象されたか、どのようなきっかけでその肖像が作成されたか、それがいかに世間に流通されていたかなどの問いに答えることを試みた。

答えの方向性は、大きく二つに分けられる。私・公的空間における作家肖像の流通と、テキスト世界の中における作者のイメージ作成である。

一方、肖像画、草双紙、浮世絵、肖像伝記集などから、

写真の発明以来、新聞や文学雑誌、全集の口絵まで、様々な資料に作家の肖像が見られる。その中から、葬儀というプライベートなイベントの際に作成された肖像画（例えば、山東京伝と京山の供養像）、仲間同士という小グループの中から発生した、お祝いの気持ちを込めた寿像（例えば、巖岳齋雪旦による「滝沢馬琴肖像並古稀自祝之題詠」、煙草屋を開いた際に作られたと思われる山東京伝像（鳥橋齋栄里画「江戸花京橋名取」）、そして作家の私生活に関する情報とともに流された文芸雑誌（「文章倶楽部」、「文章世界」など）の写真、いずれも 19 世紀を通して私・公的空間の捉え方がいかに変化していくかを考察するには興味深い資料である。また、木村黙老の『戯作者考補遺』（1845 年）などという肖像伝記集から、作家の写真や草稿を載せた近代作家の全集（例えば『透谷全集』[1902 年]）までの資料にも、ある作品群が一つの固有名詞（作者名）とその肖像のもとで統一されていく言説が成立する過程が確認できた。

他方、絵を豊富に取り入れた江戸後期の文学作品に、つまり物語世界に作者がいかに表象されているかという問題も作者の図像学的研究から浮かび上がる。黄表紙では作者を主人公として登場させる作品が数多く存在する（例えば、朋誠堂喜三二『龜山人家妖』[1787 年]、山東京伝『作者胎内十月図』[1804 年]、式亭三小馬『戯作花赤本世界』[1846 年]）。その中から、書齋の中で作品を書いている姿、机に頬杖を突いたり寝込んだりして、作品世界を想像する姿、あるいは出版者が訪問して作品を依頼される姿、というような典型的な肖像が目立っており、常套手段として、坪内逍遙の『当世書生気質』（1885-86 年）にまで使用されている。言うまでもなく、作者が作品世界に登場する行為は、視覚的な次元にとどまらず、言語空間にも現れる。例えば、「作者曰く…」という表現を通して。自然主義中心の近代小説の成立過程で、作者と語り手が区別され、作者の突入もいったん制限されていくのであるが、作者が作品世界から完全に姿を消したわけではない。しばらくして、作家・作者・語り手をほぼ一致させる、「私小説」という日本独特の文学ジャンルにおいて、作者は主人公として再登場するようになるのである。

このように、19 世紀を包括して、それを作家と作品との関係が再構築される時代として把握することによって、20 世紀の文学論者を悩ませた作者概念を再考するための出発点が得られることになるのである。

【記事執筆：ニコラ・モラール（ジュネーブ大学文学部東アジア研究所講師／日仏会館フランス事務所研究員）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

2nd Study Meeting

Aspects of an “Author” in Japan of the 19th Century

Lecturer: Nicolas Mollard (Senior Lecturer, East Asian Studies Department, University of Geneva; Researcher, Maison Franco-Japonaise Tokyo)

Discussant: Nobuaki Nakamaru (Professor, Hosei University Faculty of Letters)

Date: Friday, 19 December 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Shin Abiko (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Today, in general, the notion of an “author” conjures up the image of an “individual composer”. This reveals the extent to which Romanticism continues to be the commonly accepted thought. Despite an expansion of the market for cultural products, and the increase in copyright violation in the present day, the aesthetics of literary composition and its legal standards remain unwavering; rather

they appear to have tightened.

In the West, the formation and breakdown of the Modern-age notion of author has drawn the attention of scholars, critics and authors alike. The “Author” notion was gradually desacralised by the vanguards of Modernism (Mallarmé, Valéry, Proust, Surrealism, Russian Formalism, New Criticism, Structuralism, Post-structuralism, etc.), and in the late 1960s, Roland Barthes even declared the death of the author. Since then, the historicity of the “Author” notion has been challenged, and the topic raised of when and how the author gained a central position in the birth, dissemination and acceptance of a literary work.

The reason for choosing the 19th century, in the history of Japanese literature, as a framework is that it enables us to view the change from the Pre-modern paradigm, centring on woodblock printing and manuscript, to the Modern-age paradigm, introducing new media (news-papers, journals etc.) through movable-type printing.

My research uses an understanding of this issue as starting point in the search for the image of the 19th-century Japanese “author”, from various perspectives: not just aesthetics (originality) and law (copyright), but also literature (authors’ self-image), sociology (industrialisation of the author), philosophy (birth of the individual) and economics (authors’ income). My presentation on this occasion focussed on what might be called the iconography of the author.

Report by: Nicolas Mollard (Senior Lecturer, East Asian Studies Department, University of Geneva; Researcher, Maison Franco-Japonaise Tokyo)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成22年-26年）

基于国际日本学研究方法的“对日认识”再讨论—“对日认识”的过去·现在·未来

研究方法④“‘对日意识’的三角测量——面向未来”

第2次学习会

19世纪日本的“作者”的各种样态

報告者：尼古拉斯·莫拉尔（日内瓦大学文学部东亚研究所讲师/日法会馆法国事务所研究员）

对话者：中丸 宣明（法政大学文学部教授）

日期：2014年12月19日（星期五）18:30-20:30

会场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）

在今天，“作者”这一概念一般会给人一种“个性的创作者”的印象。这一现象体现了浪漫主义思想发展并定格为现如今的一种共通观念的过程。在文化产品市场不断扩大、侵害著作权的行为不断增加的今天，文艺创作的美学·法律性基础不仅没有动摇，反而是变得更加坚固。

在西方，关于近代性作者概念的形成和瓦解，从很早以前就开始吸引研究家、评论家、以及作家们的视线。“作者”的概念在近代前卫思潮（马拉美、瓦莱里、普鲁斯特、超现实主义、俄罗斯形式主义、新批评主义、构造主义、后结构主义）的影响下慢慢地变为非神圣化，而到了1960年代的后期则被罗兰·巴特宣告其死亡。此后，关于“作者”这一概念的历史性受到关注，作者是在什么时候以什么样的方式占据文学作品中生产·流通·享受的中枢性地位这一课题浮上了水面。

在19世纪这个框架内来理解日本文学史的意义就在于，能够俯瞰以木刻和手写本为中心的近世性模式，到以活字印刷所带来的新媒体（报纸·杂志）登场的近代性模式的转变过程。

本研究以此为出发点，不仅限于从美学（独创性）及法学（著作权）的角度，也从文学（作者的自我表象）·社会学（作者的职业化）·哲学（个性的诞生）·经济学（作者的收入）等各角度，探讨19世纪日本的“作者”形象。本次报告则将焦点放在了可称之为作者图像学的这一领域。

【执笔者：尼古拉斯·莫拉尔

（日内瓦大学文学部东亚研究所讲师/日法会馆法国事务所研究员）】



報告者：ニコラ・モラル氏（ジュネーブ大学文学部東アジア研究所講師/日法会馆フランス事務所研究员）



会場の様子

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해
제2회 연구회

19세기 일본에 있어서 ‘作者’의 제상

보고자: 니콜라 모릴(제네바대학교 문학부 동아시아 연구소 강사/日仏회관 프랑스 사무소 연구원)
대담자: 나카마루 노부아키(中丸 宣明, 호세이대학교 문학부 교수)
일 시: 2014년 12월 19일(금) 18:30~20:30
장 소: 호세이대학교 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본학연구소 연구소원, 문학부 교수)

요즘 ‘작자(作者)’라는 개념에서는 일반적으로 ‘개성적인 창조자’라는 이미지를 떠올릴 것이다. 그것은 낭만주의 사상이 현대에 이르기까지 통념으로서 어떻게 정착되어 왔는지를 말해 준다. 문화 제품 시장이 확대되고, 저작권을 침해하는 행위가 증가하는 현대에도 문예 창작의 미학·법률적인 기반은 흔들리지 않고 오히려 다져지고 있는 듯하다.

서양에서는 이러한 현대적인 작자 개념의 형성과 붕괴

가 오래전부터 연구자, 평론가, 작가들의 시선을 집중시켰다. ‘작자’의 개념은 근대 전위(말라르메, 발레리, 프루스트, 초현실주의 러시아 포르마리즘, 뉴크리티시즘, 구조주의, 포스트 구조주의 등)에 의해 서서히 비신성화되면서 1960년대 후반에는 롤랑 바르트 등이 ‘작자의 죽음’을 선언하기도 했다. 그 후 ‘작자’라는 개념의 역사성을 불문하고 언제부터 어떻게 해서 작자가 문학작품의 생산·유통·향유에 중추적인 지위를 차지했느냐는 과제가 부각되었다.

일본의 문학사를 19세기라는 틀에서 파악하는 의미는, 이 시기를 부감함으로써 목판과 사본을 중심으로 한 근세적 패러다임에서 활판 인쇄에 의한 새로운 미디어(신문·잡지 등)가 등장한 현대적 패러다임으로 전환되었다는 점을 파악할 수 있다는 데 있다.

본 연구는 이러한 문제의식을 출발점으로 하여 미학(오리지널리티)과 법학(저작권)뿐만 아니라, 문학(작자의 자기 표상)·사회학(작자의 직업화)·철학(개성의 탄생)·경제(작자의 소득) 등, 다양한 관점에서 일본의 19세기적인 ‘작자’상(象)을 밝혀내는 것을 목적으로 했다. 이번 발표에서는 작자의 도상학(圖像學)이라고도 할 수 있는 분야에 초점을 맞췄다.

【기사집필: 니콜라 모릴 (제네바대학교 문학부 동아시아 연구소 강사/ 日仏회관 프랑스 사무소 연구원)】

「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」終了

「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を受け、平成 22 年(2010 年)から取り組んだ「国際日本学の方法に基づく<日本意識>の再検討—<日本意識>の過去・現在・未来」が平成 27 年(2015 年) 3 月 31 日をもってその事業を終了いたしましたことをご報告させていただきます。この間、ご協力していただいた皆様に感謝申し上げます。

ニューズレター NO.22 翻訳者紹介

(英語翻訳) バーバラ・クロス(ロンドン大学 SOAS)
(中国語翻訳) 周 曙光(法政大学国際日本学研究所学術研究員)
(韓国語翻訳) 金 英美(法政大学国際日本学研究所学術研究員)
朴 庾卿(法政大学国際日本学研究所学術研究員)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年～平成26年）

国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来

開催日	催事名	報告者 ※敬称略	Newsletter 掲載号
2010.7.15	アプローチ① 特別研究会 いつから「国民」はいるのか—日本の場合	渡辺 浩	No. 13
2010.5.29	アプローチ② 第1回研究会 近代の〈日本意識〉の成立「日本民俗学・民族学の問題」	石井 正己、伊藤 亜人、川田 順造、 川村 湊、桑山 敬己、黄 智慧、 近藤 雅樹、崔 吉城、全 京秀、曾 士才、 鶴見 太郎、福田 アジオ、山本 真鳥、 ヨーゼフ・クライナー	
2010.4.27	アプローチ③ 第1回東アジア文化研究会 中国：党をアナトミーする	菱田 雅晴	
2010.5.31	アプローチ③ 第2回東アジア文化研究会 日中和解と、東アジア共同体—欧州に学ぶ「4つの和解」	羽場 久美子	
2010.6.22	アプローチ③ 第3回東アジア文化研究会 原点としての儒教的家父長制、そして狂気と異端 —梁石日の『血と骨』を中心に—	金 煥基	
2010.7.27	アプローチ③ 国際シンポジウム 〈日本研究の最前線—大連における多 文化共生・異文化理解の研究と実践〉	王 秀文、郭 勇、小林 ふみ子、秦 穎、 曾 士才、福田 敏彦、藤村 耕治、 山田 泉、劉 俊民、劉 振生	
2010.7.24	アプローチ④ 第1回勉強会 第二次大戦後の日本アニメ —手塚治虫の足跡—	サミュエル・カクゾロフスキー	
2010.10.9	アプローチ① 第1回研究会 吉田 真樹：倫理学・日本倫理思想史の観点からみた「日本意識」 小林 ふみ子：「和らぐ国」というアイデンティティ	小林 ふみ子、吉田 真樹	No. 14
2010.10.17	アプローチ① 第1回映画上映会『うつし世の静寂（しじま）に』	田中 優子	
2010.9.25、26	アプローチ② 第2回研究会 近代の〈日本意識〉の成立「日本民俗学・民族学の問題」	石井 正己、伊藤 亜人、植野 弘子、 笠原 政治、川村 湊、桑山 敬己、 黄 智慧、近藤 雅樹、崔 吉城、 清水 昭俊、鶴見 太郎、野林 厚志、 ハルミ・ベフ、 ハンス・ディーター・オイルシュレーガー、 松井 健、山本 真鳥、 ヨーゼフ・クライナー	
2010.12.11、12	アプローチ② 国際シンポジウム 日本民俗学・民族学の貢献—昭和前半	石井 正己、伊藤 亜人、植野 弘子、 エイミー・ボロボイ、笠原 政治、 川田 順造、川村 湊、桑山 敬己、 黄 智慧、近藤 雅樹、崔 吉城、 清水 昭俊、全 京秀、鶴見 太郎、 野林 厚志、ハルミ・ベフ、 ハンス・ディーター・オイルシュレーガー、 福田 アジオ、松井 健、山本 真鳥、 ヨーゼフ・クライナー	
2010.9.21	アプローチ③ 第5回東アジア文化研究会 日中経済協力の過去・現在と将来	張 季風	
2010.10.5	アプローチ③ 第6回東アジア文化研究会「自由」はいかにして東アジアへ 伝えられたか—洋学に転じた漢学者 中村正直	平川 祐弘	
2010.10.26	アプローチ③ 第7回東アジア文化研究会 東アジアから見た朱舜水 —文明発展の役割とそのアイデンティティ—	徐 興慶	
2010.11.12	アプローチ③ 第8回東アジア文化研究会 日韓和解のための課題—韓国の日本認識を通して	朴 裕河	
2010.12.8	アプローチ③ 第9回東アジア文化研究会 忘れられた近代インドと日本の交流	ブリジ・タンカ	
2010.10.31～11.2	アプローチ④ 国際日本学シンポジウム 日本のアイデンティティ —形成と反響—	アニック・ホリウチ、安孫子 信、 王 秀文、小口 雅史、川田 順造、 クリスティアーナ・セギー、小林 ふみ子、 島田 信吾、ジョセフ・キブルツ、 鈴木 裕輔、タイモン・スクリーチ、 ハンス・ディーター・オイルシュレーガー、 パイ・ヒュンイル、星野 勉、 ヨーゼフ・クライナー、 ローサ・カーロリ	
2010.10.28	アプローチ④ 第2回勉強会 古代東アジアにおけるヒトとモノの動き —ヨーロッパ人によるアプローチ—	シャルロット・フォン・ヴェアシュア	

開催日	催事名	報告者 ※敬称略	Newsletter 掲載号
2011.1.8	アプローチ① 第2回研究会	小口 雅史、鈴木 裕輔、高橋 寿美子	No. 15
2011.2.26、27	アプローチ① 第1回シンポジウム 日本意識の時空	小秋元 段、米家 志乃布、坂本 勝、 竹内 晶子、彭 丹、横山 泰子	
2011.4.2	アプローチ① 第3回研究会 信仰から見た「日本意識」	内原 英聡、高山 秀嗣	
2011.5.21	アプローチ① 第4回研究会 近世日本の大衆文化における「日本」意識の表現 —17・18世紀を中心に—	大木 康、小林 ふみ子、米家 志乃布、 鈴木 裕輔、田中 優子	
2011.6.25	アプローチ① 第5回研究会 曲亭馬琴の日本意識	大屋 多詠子	
2011.7.16、17	アプローチ① 国際シンポジウム 日本意識と対外意識	石上 阿希、岩崎 均史、大木 康、 川村 湊、小林 ふみ子、 タイモン・スクリーチ、田中 優子、 ロナルド・トビ、渡辺 浩	
2011.5.20、21	アプローチ② 第1回研究会 日本民俗学・民族学の貢献 —昭和20-40年代まで—	清水 昭俊、全 京秀、中生 勝美、 長島 信弘	
2011.6.10、11	アプローチ② シンポジウム 日本民俗学・民族学の貢献 —終戦から昭和40年代まで—	エイミー・ボロボイ、川田 順造、 杉山 晃一、鶴見 太郎、ハルミ・ベフ、 ヨーゼフ・クライナー	
2011.1.13	アプローチ③ 第10回東アジア文化研究会 「和同開珎」の文字から見た中日の文化交流史	王 維坤	
2011.4.27	アプローチ③ 第1回東アジア文化研究会 中国における日本文学史研究の新展開 —王健宜氏『日本近現代文学史』をテキストに—	楊 偉	
2011.5.25	アプローチ③ 第2回東アジア文化研究会 中国における思想史研究の方法論に関する思索	陳 毅立	
2011.6.29	アプローチ③ 第3回東アジア文化研究会 中国における近現代日中関係研究の発展と限界 —最新日本研究成果『日本近現代対華関係史』を通じて—	王 雪萍	
2011.7.27	アプローチ③ 第4回東アジア文化研究会 日本警戒論の歴史的脈絡をたどる —米慶余『日本近現代外交史』を読む—	馬場 公彦	
2011.6.23	アプローチ④ 第1回勉強会 日本哲学へのベルクソンの影響 —西田幾多郎と九鬼周造の場合—	アルノー・フランソワ	
2011.10.15	アプローチ① 第6回研究会 映画の中の日本	マートライ・ティタニラ	No. 16
2011.12.17	アプローチ① 第7回研究会「日本」と「義理」	李 知蓮	
2011.10.21	アプローチ② 特別研究会 日本民俗学・民族学の貢献 —昭和20-40年代まで—	ロナルド・ドーア	
2011.11.18、19	アプローチ② 第3回研究会 日本民俗学・民族学の貢献 —昭和20-40年代まで—	大島 明秀、桑山 敬己、山崎 幸治	
2011.8.3	アプローチ③ 第5回東アジア文化研究会 中国研究者から見た日本経済の歩み —楊棟樑著『日本近現代経済史』の査読を通じて—	郭 勇	
2011.9.28	アプローチ③ 第6回東アジア文化研究会 日本政治研究の視座を考察する —王振鎖・徐万勝『日本近現代政治史』を読む—	及川 淳子	
2011.10.26	アプローチ③ 第7回東アジア文化研究会 国家体制を支える制度としての「家」 —『日本近現代社会史』を媒介に—	李 潤沢	
2011.11.30	アプローチ③ 第8回東アジア文化研究会 日本近代美術史に関する一考察 —彭修銀『日本近現代絵画史』を媒介として—	川邊 雄大	
2011.12.7	アプローチ③ 第9回東アジア文化研究会 中国における日本文化史認識	姜 克實	
2011.10.2	アプローチ④ 国際シンポジウム 日本の国家アイデンティティの形成と「土着性」の問題	アラン・ロシエ、フランソワ・マセ、 星野 勉、マルセル・デチエンヌ、 ヨーゼフ・クライナー、渡辺 浩	
2011.11.4～6	アプローチ④ 2011年アルザスシンポジウム 日本のアイデンティティを<象徴>するもの	安孫子 信、アラン・ロシエ、 内原 英聡、ウルリッヒ・ハインツェ、 大石 直記、川田 順造、ギョーム・カレ、 クリスティアーン・セギー、合田 正人、 相良 匡俊、ジョセフ・キブルツ、 鈴木 裕輔、星野 勉、 マヤ・ミルシンスキー、山中 玲子、 マリア・エウヘニア・デ・ラ・ニューエス・ペレス、 ヨーゼフ・クライナー、 ロバート・ボーゲン	

催事一覧

開催日	催事名	報告者 ※敬称略	Newsletter 掲載号
2011.11.25	アプローチ④ 第2回勉強会 キルヘル・ケンペル・シーボルトが描く日本の仙像	ジョセフ・キブルツ	No. 16
2011.12.19	アプローチ④ 第3回勉強会 20世紀前半ドイツにおける日本文学と日本神話の受容について	ユディット・アロカイ	
2011.12.16、17	アプローチ③、アプローチ④ 2011年大連民族学院／法政大学シンポジウム 参照枠としての中国と＜日本意識＞	安孫子 信、井上 亘、王晓慧、王秀文、 王 敏、小口 雅史、何 長文、 小林 ふみ子、相良 匡俊、秦 穎、 星野 勉、劉 俊民、劉 振生	
2012.3.20	法政大学サステナビリティ研究教育機構・国際日本学研究所共催 国際シンポジウム 震災後のいま問いかける「なぜ、『雨二モマケズ』が読まれるのか」	大倉 季久、岡村 民夫、賈 蕙萱、 金 容煥、杉井 ギサブロー、関いずみ、 張 怡香、吉野 馨子、雷 剛、王 敏	No. 17
2012.1.21	アプローチ① 第8回研究会 薬品会から見える日本意識	川崎 瑛子	
2012.3.9	アプローチ① シンポジウム <日本>を意識する時	木村 純二、佐藤 悟、福田 安典、 横山 泰子	
2012.6.30	アプローチ① 第1回研究会 「国家ノ生存競争」と「衆民政」—小野塚喜平次の対外観と日本	春名 展生	
2012.3.10、11	アプローチ② 国際シンポジウム 岡正雄—日本民族学の草分け	岡 千曲、岡田 淳子、川田 順造、 クラウス・アントニ、クリストフ・アントワイラー、 桑山 敬己、近藤 雅樹、清水 昭俊、 住谷 一彦、セップ・リンハルト、 祖父江 孝男、中生 勝美、 ハンス・ディーター・オイルシュレーガー、 平藤 喜久子、ベルンハルト・シャイト、 ヨーゼフ・クライナー	
2012.5.25	アプローチ② 第1回研究会 日本民俗学・民族学の貢献	竹田 旦	
2012.1.11	アプローチ③ 第10回東アジア文化研究会 日本研究の可能性 —臧佩紅著『日本近現代教育史』を媒介に—	劉 迪	
2012.3.21	アプローチ③ 東アジア文化研究会 特別研究会 変化の中の日本観 —東アジア同志の対話—	賈 蕙萱、金 容煥、張 怡香、雷 剛	
2012.5.30	アプローチ③ 第2回東アジア文化研究会 長崎唐通事とその子孫	陳 東華	
2012.6.27	アプローチ③ 第3回東アジア文化研究会 韓国語における中国語からの借用語と日本語の語彙の影響	オリヴィエ・バイルブル	
2012.7.11	アプローチ③ 第4回東アジア文化研究会 19世紀における東アジア諸国の対外意識の比較	王 曉秋	
2012.3.13	アプローチ④ 第4回勉強会 近代国家の構築 —アフリカの視点から、明治日本と現代アフリカとを、時代を跨いで比較する—	オーギュスタン・ロワダ	
2012.7.5	アプローチ④ 第1回勉強会 歌でつなごう —NHK 紅白歌合戦における国民の上演—	シェリー・プラント	
2012.7.18	アプローチ④ 第2回勉強会 ナポリステック博物館（プラハ）の日本コレクション —日本の伝統芸術に対する中央ヨーロッパの視点—	ヘレナ・ガウデコヴァ	
2012.4.12	アプローチ③、アプローチ④ 第1回東アジア文化研究会 “新世界の中心”としての上海 —上海万博の中国館＜東方の冠＞を読む—	オーレリ・ネヴォ	
2012.9.21	アプローチ① 第1回みちのくワークショップ 東北文学と日本意識（近世篇）	大木 康、小林 ふみ子、田中 優子、 津田 眞弓、横山 泰子	No. 18
2012.9.22	アプローチ① 第2回研究会 前島志保：戦間期『主婦之友』における「家庭」と「日本／国家」 衣笠正晃：1910～20年代の国文学	衣笠 正晃、前島 志保	
2012.10.12	アプローチ① 第3回研究会 イーハトーヴと賢治の日本・国際意識 —浮世絵の観点から—	人見 千佐子	
2012.11.9	アプローチ① 第4回研究会 浦島説話の成立と展開	三舟 隆之	
2013.1.18	アプローチ① 第2回みちのくワークショップ 東北文学と日本意識（古代・中世篇）	小口 雅史、小秋元 段	
2013.3.16、17	アプローチ① シンポジウム 江戸人の考えた日本の姿 —世界の中の自分たち—	板坂 則子、川添 裕、小林 ふみ子、 長島 弘明、延廣 眞治、安村 敏信、 横山 泰子	
2012.10.12、13	アプローチ② 第2回研究会 <日本意識>の成立 —日本民俗学・民族学の貢献Ⅱ	赤嶺 政信、上江洲 均、近藤 健一郎、 佐々木 利和、泉水 英計	

開催日	催事名	報告者 ※敬称略	Newsletter 掲載号
2012.11.30 ~ 12.1	アプローチ② 第3回研究会 <日本意識>の成立 —日本民俗学・民族学の貢献Ⅲ—	石川 日出志、パトリック・ハインリッヒ	No. 18
2012.8.1	アプローチ③ 第5回東アジア文化研究会 格差社会と「下からのナショナリズム」 —ナショナリズム論からの日中欧の比較考察—	安井 裕司	
2012.9.26	アプローチ③ 第6回東アジア文化研究会「日中国交正常化40年」を超えて —石橋湛山の対中国交正常化への取り組み—	鈴木 裕輔	
2012.10.31	アプローチ③ 第7回東アジア文化研究会 日本最大の経済パートナー・中国経済をどう見る	西園寺 一晃	
2012.11.7	アプローチ③ 第8回東アジア文化研究会 言語接触と文化交渉学 —中国言語学および翻訳論の立場から—	内田 慶市	
2012.12.5	アプローチ③ 第9回東アジア文化研究会 東アジアの宗教と社会	橋爪 大三郎	
2013.1.23	アプローチ③ 第10回東アジア文化研究会 日本対立の心理	石川 好	
2012.11.2 ~ 4	アプローチ④ 2012年アルザスシンポジウム 国家アイデンティティと宗教	安孫子 信、内原 英聡、王 敏、川田 順造、 坂本 勝、ジャン=ピエール・ベルトン、 ジョセフ・キブルツ、鈴木 裕輔、 高橋 悠介、ディディエ・デーヴァン、 フレデリック・ジラルム、 フレデリック・ルシーニユ、星野 勉、 マーク・トゥーエン、マチエイ・カーネルト、 ヨーゼフ・クライナー	
2013.1.22	アプローチ④ 第3回勉強会 現代マンガに登場する、ロボットやサイボーグ、 ミュータント、ハイブリッドたちを哲学する —ポストヒューマンとはなにか?—	チエリー・オケ	
2013.2.22	アプローチ④ 第4回勉強会 九鬼周造の実存的美学	ヴァンサン・ジロー	
2013.7.20	アプローチ① 第1回研究会 「夫婦有別」と「夫婦なかよく」 —清朝中国と徳川日本—	渡辺 浩	No. 19
2013.9.21	アプローチ① 第1回シンポジウム メディアと日本意識 —批判とは何かを、若い世代が考える—	川崎 那恵、佐藤 東洋、三浦 友幸、 李 知蓮	
2013.10.25	アプローチ① 第1回みちのくワークショップ近代篇	山内 明美	
2013.10.18 ~ 20	アプローチ② 国際シンポジウム日本とはなにか —日本民族学の20世紀— 鳥居・澁澤・梅棹・佐々木	秋道 智彌、クリストフ・アントワラー、 小長谷 有紀、小林 光一郎、 小山 修三、齋藤 玲子、佐々木 史郎、 清水 昭俊、全 京秀、田村 将人、 手塚 薫、中生 勝美、中牧 弘允、 ハンス・ディーター・オイルシュレーガー、 ヨーゼフ・クライナー	
2013.4.10	アプローチ③ 第1回東アジア文化研究会 禹王を巡る日中の文化交流	大脇 良夫	
2013.5.29	アプローチ③ 第2回東アジア文化研究会 勝海舟の中国観	上垣外 憲一	
2013.6.26	アプローチ③ 第3回東アジア文化研究会 近代東アジアの文脈における日本語：中国人日本語学習史からの視点	沈 国威	
2013.7.4	アプローチ③ 第4回東アジア文化研究会 「東アジアから考える」はいかにして可能か? —日中思想交流経験を中心として—	黄 俊傑	
2013.9.25	アプローチ③ 第5回東アジア文化研究会 傳抱石の日本留学とその影響 —傳抱石書簡・金原日記を読む—	廖 赤陽	
2013.10.30	アプローチ③ 第6回東アジア文化研究会 わが祖父郭沫若と日本 —その異文化体験の意味—	藤田 梨那	
2013.5.30	アプローチ④ 第1回勉強会 科学は普遍的か?	ジャン=マルク・レヴィ=ルブロン	No. 20
2013.11.15	アプローチ① 第2回みちのくワークショップ近代篇 近代東北が見た(日本)	河西 英通	
2013.12.20	アプローチ① 第2回研究会 地獄草紙の力カチュアとしての勝絵	出口 弘	
2014.3.15、16	アプローチ① ワークショップ 和の国? 武の国? 神の国! ? —江戸から見る日本人の自国認識の変容—	内原 英聡、ウルバノヴァー・ヤナ、 大木 康、大屋 多詠子、川添 裕、 韓 京子、金 時徳、小林 ふみ子、 米家 志乃布、竹内 晶子、田中 優子、 津田 眞弓、林 久美子、福田 安典、 横山 泰子	
2013.11.22	アプローチ③ 第7回東アジア文化研究会 何香凝と日本留学—革命への関わりと美術との出会い—	竹内 理樺	
2013.12.18	アプローチ③ 第8回東アジア文化研究会 周恩来の中日関係観	曹 応旺	

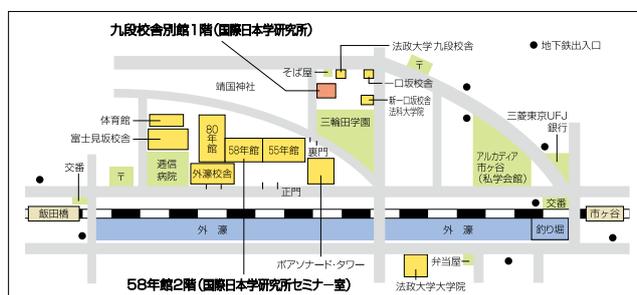
催事一覧

開催日	催事名	報告者 ※敬称略	Newsletter 掲載号
2014.1.22	アプローチ③ 第9回東アジア文化研究会 法政速成科のメタヒストリー —梅謙次郎・汪兆銘・周恩来—	古俣 達郎	No. 20
2014.2.26	アプローチ③ 第10回東アジア文化研究会 日本古代・中世の教育と仏教	大戸 安弘	
2013.11.1 ~ 3	アプローチ④ 2013年アルザスシンポジウム 国際日本学シンポジウム「日本のアイデンティティとアジア」	安孫子 信、アリス・ベルトン、 アンドレ・クライン、井上 亘、 ヴィクトリア・エシュバツハ・サボー、 王 敏、大貫 恵美子、上垣外 憲一、 カリーヌ・マランジャン、川田 順造、 サミュエル・ゲー、鈴木 聖子、 鈴木 裕輔、フィリップ・ペルティエ、 星野 勉、宮本 圭造、湯 重南、 ヨーゼフ・クライナー	
2013.12.16	アプローチ④ 第2回勉強会 西田に於ける包含の論理の図式的説明	ジャサント・トランブレー	
2014.2.28	アプローチ④ 第3回勉強会 近現代芸術における芸術と科学との相互作用について	ガブリエル・デカマス	
2014.3.22	アプローチ④ 第4回勉強会 トルコにおける日本学	エルダル・キュチュキユルチュン、 オウズ・バイカラ	No. 21
2014.7.26	国際日本学シンポジウム <日本意識>の過去・現在・未来	安孫子 信、大木 康、川田 順造、 小林 ふみ子、鶴見 太郎、濱田 陽、 菱田 雅晴、山田 泉、 ヨーゼフ・クライナー、横山 泰子	
2014.6.26	アプローチ① 第1回研究会 1764年の朝鮮通信使の視座からみる日本意識	鄭 敬珍	
2014.9.26	アプローチ① 第2回研究会 只野真葛のキリシタン考	ベティーナ・グラムリヒ・オカ	
2014.10.24	アプローチ① 第3回研究会「女らしさ」と国文学研究	衣笠 正晃	
2014.10.3、4	アプローチ② 2014年度研究会 両みんぞく学のパラダイムの検討	川村 伸秀、清水 昭俊、福田 アジホ、 ヨーゼフ・クライナー	
2014.4.23	アプローチ③ 第1回東アジア文化研究会 韓国における日本観の変容	徐 賢燮	
2014.5.28	アプローチ③ 第2回東アジア文化研究会 昭和維新運動とアジア主義	筒井 清忠	
2014.6.25	アプローチ③ 第3回東アジア文化研究会 世界の日本観の変遷・・・米欧アジアの知識人との対話から	会田 弘継	
2014.7.28	アプローチ③ 第4回東アジア文化研究会 台湾における日本研究の変容	于 乃明	
2014.8.6	アプローチ③ 第5回東アジア文化研究会 中国における日本研究の変容—北京大学を例として	孫 建軍	
2014.10.22	アプローチ③ 第6回東アジア文化研究会 中国若者の日本人観に見る「知の拡散」	毛 丹青	
2014.6.12	アプローチ④ 国際シンポジウム 受容と抵抗 —西洋科学の生命観と日本	アラン・ロシェ、金森 修、木島 泰三、 チエリー・オウ、ドミニック・レステル、 檜垣 立哉、ポール・デュムシエル、 村上 靖彦、米山 優	
2014.9.25	アプローチ④ 第1回勉強会 黒沢清監督作品『トウキョウソナタ』の魅力 —ハイブリダイゼーション(交雑)とモデュレーション(転調)—	クレリア・ゼルニック	

※2014年11月1日～2015年3月31日までの研究会等の記事は本紙に掲載されています。



〒102-0073
 東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1階
 TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884
 E-mail: nihon@hosei.ac.jp
 URL: http://hijas.hosei.ac.jp



この冊子は再生紙を使用しています。